518
59

中部及北部支那に於ける貿易状況

始

中部及北部支那に於ける貿易狀況

農商務省商務局

58-59

例言

本書は曩に中部及北部支那へ出張を命ぜられたる農商務技手荻田才之助の調査報告する所に係り同地方に於ける貿易狀況を知るに便なるを以て茲に之を印刷に附し以て當路の參考に資す

大正十二年五月

農商務省商務局

大正
12.6.13
内交

中部及北部

支那に於ける貿易狀況

目次

第一、緒言……一
第二、支那の對外貿易……一
第三、長江一帶の貿易……八
(一)、上海……一五
(二)、杭州……二二
(三)、蘇州……二六
(四)、南通……三〇
(五)、鎮江……三五
(六)、南京……三九

大正 12 内交

(七、蕪湖……四三
(八、九江……四六
(九、漢口……五〇
(十、岳州……五八
(十一、長沙……六〇
(十二、沙市……六四
(十三、宜昌……六七
(十四、重慶……六九

第四、北部支那の貿易……七八

(一、北京……七九
(二、張家口……八一
(三、天津……八四
(四、濟南……九一
(五、青島……九五

第五、結論……一〇〇

(一、支那に於ける工業の發達と、本邦商品の蒙る影響……一〇〇
(二、日貨排斥と本邦品の蒙りたる影響……一〇二
(三、外國品と競爭狀態にある本邦品……一〇三
(四、外國品或は支那品との競爭多少存するも、本邦品特に優勢なる地位を占めつゝあるもの……一〇四
(五、將來有望と認めらるゝ商品……一〇五
(六、本邦商品販路の維持擴張上必要なる手段方法……一〇六
(七、今後の對支貿易に就て……一一二

中部及北部支那に於ける貿易狀況

農商務技手　荻田才之助

第一、緒言

支那關稅改訂會議の爲め客年四月上海に出張、同地に約半年滯在致した私は、同會議終了後更に中部及北部支那に於ける貿易狀況を調査致すことゝなり、同年十月七日より十二月二十二日に至る迄約二箇月半の間に、上海乃至重慶間に於ける長江一帶竝同附近の貿易狀況及北京、張家口、天津、濟南、青島等を調査の上、舊臘二十三日上海發の熊野丸て歸朝致した次第でありまして、玆に其概要を申上げますと、

第二、支那の對外貿易

各地方に於ける貿易概況を申上ぐる前に、支那全國の對外貿易概況に就て聊か申上げて置き度いと

思ひます。

（一）、**大正十年に於ける輸出入貿易額**　支那海關統計に依る大正十年即ち一昨年に於ける支那全國の對外貿易額は、輸入九億〇六百十二萬兩（海關兩、以下同じ）、輸出六億〇百二十六萬兩、輸出入合計十五億〇七百三十八萬兩でありまして、差引三億〇四百八十六萬兩の輸入超過を示し、之を前年に比較致しますと、輸入額に於て一割九分、輸出額に於て一割一分、輸出入總額に於て一割六分、及輸入超過額に於て三割八分を孰れも增加致したのであります。

尤も、以上は單に輸出入品の價額上より比較致したのでありまして、試みに各品の數量上より比較致しましたならば、寧ろ減少を來してゐるものが多いのであります。而して斯く數量上に於て減少し、價額上に於て增加致したのは、主として銀塊相場の暴落に基く儀と考へらるゝのであります。即ち右銀塊相場暴落の結果として、同年の外國爲替相場は前年に比し異常なる差異を生じ、例へば日、英、米爲替の如きは其差五〇%より九〇%に達してゐるのでありまして、夫が爲めに銀貨國たる支那に於ける對外貿易價額上の數字を大ならしめたること尠なからぬ儀と考へられます。

（二）、**大正十年に於ける對手國別輸出入額比率**　次に大正十年に於ける對手國別輸出入額比率を掲げ、之を前年の同比率に比較致しますと、

（甲）、對手國別輸入額比率（輸入額一千萬兩以上のもの）

大正十年 國名	比率
1、香港	二割・四八
2、日本（臺灣及朝鮮を含む）	二・三八
3、北米合衆國（布哇を含む）	一・八八
4、英吉利	一・六一
5、英領印度	〇・三八
6、澳門	〇・一九
7、獨逸	〇・一四
8、蘭領印度	〇・一四
9、加奈陀	〇・一三
10、白耳義	〇・一一
11、其他	〇・五六

大正九年 國名	比率
1、日本（臺灣及朝鮮を含む）	二割・九九
2、香港	一・九九
3、北米合衆國（布哇を含む）	一・七九
4、英吉利	一・六五
5、英領印度	〇・四一
6、加奈陀	〇・二五
7、蘭領印度	〇・一三
8、其他	〇・七九

右は試みに輸入額一千萬兩以上に達したものを擧げたのでありますが、茲に注意を要しますのは、

（イ）、獨逸よりの輸入は、戰時中杜絶してゐましたものが、平和克復の結果大正八年に初めて三百

六十八兩を、次で大正九年には五百四十二萬兩を、更に大正十年には一千三百三十五萬兩（全輸入額の一分四厘）を輸入するに至りたること。

（ロ）、白耳義　よりの輸入額も、大正八年には二十三萬兩に過ぎざりしものが、大正九年には四百九十七萬兩に、更に大正十年には一千〇六十四萬兩（全輸入額の一分一厘）に上りたること。

（ハ）、我日本（臺灣及朝鮮を含む）　よりの輸入額が、大正八年には二億五千六百萬兩に上りゐたるもの、大正九年には二億三千九百萬兩（全輸入額の二割九分九厘）に、更に大正十年には二億二千二百萬兩（全輸入額の二割三分八厘）に下つたこと。

とであります。

（乙）、對手國別輸出額比率（輸出額一千萬兩以上のもの）

大正十年 國名	比率
1、日本（臺灣及朝鮮を含む）	三・一一
2、香港	二・五四
3、北米合衆國（布哇を含む）	一・四九
4、英吉利	〇・五一
5、佛蘭西	〇・四〇
6、露西亞（露領亞細亞其他を含む）	〇・三八
7、新嘉坡	〇・三二
8、其他	一・二五

大正九年 國名	比率
1、日本（臺灣及朝鮮を含む）	三・〇五
2、香港	二・五二
3、北米合衆國（布哇を含む）	一・二四
4、英吉利	〇・八五
5、佛蘭西	〇・三九
6、新嘉坡	〇・三一
7、露西亞（露領亞細亞其他を含む）	〇・二七
8、和蘭	〇・二〇
9、其他	一・一七

是亦一千萬兩以上のものを擧げたのでありますが、其額に於ては一千萬兩に達せぬながら、

（イ）、獨逸　への輸出額が、大正八年には僅に十六萬兩に過ぎざりしもの、大正九年には百七十六萬兩に、更に大正十年には六百七十七萬兩に上りたること、及

（ロ）、白耳義　への輸出額が、大正八年には三百九十九萬兩、大正九年には三百二十七萬兩、及大正十年には百四十四萬兩を算してゐますことは、戰後支那と右兩國との貿易關係が、漸次復活せんとしつゝあるものと認めらるゝのであります。

更に我日本（臺灣及朝鮮を含む）に對する輸出額を見まするに、大正八年に二億一千八百萬兩なりしもの、大正九年には一億六千五百萬兩に下り、大正十年には亦一億八千七百萬兩に增加致したのであります。

（三）、戰前より戰後に亘る支那貿易の消長　以上は大正十年の支那對外貿易額を、前年の同貿易額に比

較致したのでありますが、尙ほ參考の爲め戰前より戰後に亘る支那貿易の消長を、特に指數に依つて表示致しますと、

○戰前、戰時及戰後の支那對外貿易額指數表（戰前即ち大正二年を一〇〇としたるもの）

年次	輸入額	輸出額	輸出入總額
大正二年	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同　三年	一〇〇	八八	九五
同　四年	八〇	一〇四	九〇
同　五年	九一	一一九	一〇三
同　六年	九六	一一五	一〇四
同　七年	九七	一二〇	一〇七
同　八年	一一三	一五六	一三一
同　九年	一三四	一三四	一三四
同　十年	一五九	一四九	一五五

而して右に依るに、戰前、戰時及戰後を通じ、輸出額に於ては大正八年、又輸入額及輸出入總額に於ては大正十年を以て最高となすのであります。

（四）、支那に於ける外國商社並外國人數

尙ほ參考の爲め、支那に於ける外國商社並外國人數を擧げますと、

○支那に於ける外國商社並外國人數（大正十年）

國籍	商社數	人數	國籍	商社數	人數
日本	六、一四一	一四四、四三四	白耳義	二七	五〇五
露西亞	一、六一三	六八、二五〇	諸威	一二	二二七
英吉利	七〇三	九、二九八	瑞典	九	四三四
北米合衆國	四一二	八、二三〇	西班牙	七	二八六
佛蘭西	二二二	二、四五三	伯剌西爾	六	四二
葡萄牙	一五二	三、四九三	澳地利	〇	四〇
獨逸	九二	一、二五五	匈牙利	〇	八
伊太利	四二	五八七	墨西哥	〇	一
和蘭	三一	四八六	其他	一四	一九三
丁抹	二八	五四七	計	九、五一一	二四〇、七六九

第三、長江一帶の貿易

私の今回の支那旅行中、最も強く感じたものは何てあるかとの質問を受けたと致したならば、私は言下に楊子江即ち長江でありますとお答へするに躊躇致さぬ程、江其もの、偉大なることは無論のこと舟揖の便、灌漑の利其他の甚大なること、さては風景の絶大なること等に驚歎致したのであります。

御承知の如く、此長江は其源を遠く西藏の東北に發し、東流して支那本土に入り、雲南、四川、湖南、湖北、江西、安徽及江蘇の七省を貫通して東海に注ぐのでありまして、其延長實に三千浬、灌域無慮七十五萬平方哩に及び、江口の如き其幅七十哩に達して居るのであります。で、私の如き初めての渡航者は、同江の注ぐ濁流の爲めに、遙かの海水迄が一面に濃厚なる茶褐色に變じてゐることに先づ一驚を喫し、次て河口に入りながら猶ほ内海を行くの觀あることに再驚を喫し、更に十二日間の溯江を試むるに至つて、倍々其偉大さに喫驚せざるを得なかつた次第であります。

私は嘗て支那の詩文等て「長堤萬里」といふ句を見ます毎に、又例の支那式形容かと一笑に附してゐたのてありますが、其實上海より宜昌に至る約一千浬の間は、殆ど長堤の間を過行くのでありまして、支那の一里は我五町餘にしか當らぬのでありますから、事實數千支那里の長堤となるのてありまして、之に對し「萬里」との形容は、必ずしも不當てないことが始めて了解せられたのであります。

其他「南船北馬」の如き、長江に關する形容詞中には、吾人をして如何にもと首領せしむるに足るものが尠からぬのであります。

次に、長江の航運狀況を申上げますと、上海より上流一千五百餘浬間は、現に汽船の航行を爲し居るのでありまして、當長江に初めて外國汽船の航行を許されましたのは、彼の一八五八年（我安政五年）の「アルロー號」事件の條約に依り、一八六一年（我文久元年）からであります。而して目下同江に於ける航運の發達は實に顯著なるものがあるのてありまして、今之を（一）上海漢口間、（二）漢口宜昌間、（三）宜昌重慶間、（四）重慶叙州間の四區に分つて申上げますと、

（一）、上海漢口間六百浬　此間は、夏季增水中には能く一萬五千噸の大船を浮ぶるに足るのてありまして、現下本航路に從事致してゐますのは、

（イ）、日本　日清汽船會社汽船—鳳陽丸（二、八〇三噸）以下九隻
（ロ）、英國　太古洋行汽船—吳淞（二、一一九噸）以下九隻
（ハ）、英國　怡和洋行汽船—公和（二、八二五噸）以下八隻
（ニ）、支那　招商局汽船—江安（三、一四一噸）以下八隻
（ホ）、支那　寧紹公司汽船—寧紹（一九二〇噸）一隻
（ヘ）、主として支那資本に依り英國々旗の下に成立せる　鴻安公司汽船—長安（一、三〇六噸）以下四隻

合計汽船會社數六、汽船數三十九隻、登簿噸數七萬〇二百六十一噸でありまして、本航路には普通上航に約八十時間、下航に約六十時間を要するのであります。

(二)、漢口宜昌間三百八十七浬　本航路は前述上海漢口線に比較致しまして、水深概して淺く、且つ冬季に於ける減水著しき爲め、其所用汽船も亦從つて吃水の淺い特殊構造のものに屬するのであります。而して現下本航業に從事してゐますのは、

(イ)、日本　日清汽船會社汽船—大亨（一、一二〇噸）及大元（八五六噸）の二隻
(ロ)、英國　怡和洋行汽船—江和（一、三八八噸）以下三隻
(ハ)、英國　太古洋行汽船—洞庭（一、二六四噸）以下三隻
(ニ)、支那　招商局汽船—快利（八七九噸）以下三隻

合計汽船會社數四、汽船數十一隻でありまして、本航路には普通上航に四日間、下航に三日間を要するのであります。

(三)、宜昌重慶間三百七十浬　本水路に於ける汽船航行の自由は、明治二十八年の下關條約に依つて得たのでありまして、夫より四年目たる明治三十一年の春に至り、彼の四川通として著名なる英人アーチバルト、リットル氏（今は故人）が、流石の難航路に見事汽船を浮ぶるの先鞭を着けて以來、同航路の發展は實に顯著なるものあり、今や航行汽船二十隻を算するの盛況を示しつゝあるのであります。

而して本航路は、上海漢口間、漢口宜昌間の航路とは遽に一變し、所謂三峽の險難を始めとし、急湍亦六十餘箇所に及び、世界に於ても著名なる難航路たるが故に、前述漢口宜昌間航行の船舶に比し、一層淺吃水にして且つ特殊構造の汽船に限られ居るのであります。

さりながら、斯る著名なる危險航路も、現下に於ては各國汽船間に一大競爭を惹起しつゝあるのでありまして、試みに本航路に從事しつゝある汽船數を擧げますと、

(イ)、日本　天華洋行汽船—聽天丸（五一六噸）及行地丸（五六七噸）
(ロ)、日本　日清汽船會社汽船—雲陽丸（五九六噸）
(ハ)、英國　太古洋行汽船—萬縣（四七五噸）
(ニ)、英國　怡和洋行汽船—福和（五〇〇噸）
(ホ)、英國　隆茂洋行汽船—隆茂（六七一噸）
(ヘ)、英國　亞細亞石油會社汽船—安瀾（一四二噸）
(ト)、米國　大來洋行汽船—大來喜（五六三噸）及大來裕（三二八噸）
(チ)、米國　美仁洋行汽船—美仁（四七五噸）
(リ)、米國　美孚公司汽船—美灘（八八噸）

(ヌ)、表面の國籍は佛國なるも事實は支那人所有　聚福洋行汽船—福源（五六三噸）、新蜀通（五六三噸）及蜀亨（四九五噸）

(ル)、表面の國籍は佛國なるも事實は支那招商局所有　華法公司汽船—江慶（五七六噸）

(ヲ)、表面の國籍は佛國なるも事實は支那人所有　中法公司汽船—鴻江（一九八噸）及鴻福（一九八噸）

(ワ)、同上　峽江公司汽船—峽江（一八五噸）

(カ)、同上　吉利洋行汽船—吉慶（三六六噸）

(ヨ)、支那　康寧公司汽船—安寧（四八三噸）

合計汽船會社數十五、汽船二十隻、登簿噸數八千五百四十八噸に上つて居るのであります。

尙ほ本航路は、減水の爲め毎年十一月上旬若くは中旬より翌年三四月頃迄汽船の航行不可能となるを常と致したのでありますが、客年は有力なる四川商人の協同出資に依りまして、特に冬期航行用汽船字水號（本船は長さ百六十呎、吃水四呎六吋にして、載貨量は綿絲大俵四百俵此重量約八十噸）が建造せられ、右の外二隻の小型汽船と共に都合三隻にて、客年十一月以來航行し來つた所、本冬期に於ける減水の度特に烈しかりし爲め、多分一月中に航行を停止した筈でありますが、將來同種汽船の多數建造は、本水路の冬期航行に貢献すること尠からぬ儀と考へられます。

(四)、重慶叙州間二百十浬　本航路は、汽船の通ずる最上流に屬するのでありますから、使用汽船の如きも前述宜昌重慶間航行の汽船に比し、一層淺吃水のものたるを要するのであります。然も夫すら冬期間の航行は無論不可能なのであります。而して冬期以外之が航行に從事しつゝあるのは、

(イ)、英國　隆茂洋行汽船—蜀通（一九六噸）

(ロ)、支那　康寧公司汽船—安康（一六二噸）

(ハ)、表面の國籍は佛國なるも共實支那人の所有　麥司洋行汽船—漢華

の三隻でありまして、右の外前述字水號の如きも亦增水期に於ては同航路に使用せらるゝ筈なのであります。

以上は、汽船の航行し得らるゝ區域に屬し、夫より上流は民船の通路に限らるゝのでありまして、然も叙州の上流三十餘浬の屏山縣を以て普通終局となすのであります。

更に長江と貿易との關係を申上げますと、同江一帶に於ける現在の貿易港は、上海、鎮江、南京、蕪湖、九江、漢口、岳州、長沙、沙市、宜昌及重慶の十一港でありまして、以上諸港に於ける對外貿易額は、

○長江一帶の貿易港に於ける大正十年中對外貿易額（單位一萬海關兩）

港名	輸入額	輸出額	輸出入總額
上海	四二、五五一	二一、〇五三	六三、六〇四
鎮江	五五七	三五	五九二

南京	八二七	二五二	一、〇七九	
蕪湖	二九一	九六	三八七	
九江	一八四	—	一八四	
漢口	四、七四七	一、〇二五	五、七七二	
岳州	一	—	一	
長沙	一三五	—	一三五	
沙市	四二	—	四二	
宜昌	四三	—	四三	
重慶	六六	四六	一二二	
合計	四九、四四四	二二、五〇七	七一、九五一	

備考「—」印は一萬兩に滿たざるもの

合計七億二千萬兩即ち支那に於ける對外輸出入貿易總額の約四割七分に達して居るのであります。

右に徵するも、長江一帶に於ける對外貿易の、支那對外貿易上頗る重要なる地位を占めつゝあることを了解せらるゝのであります。

以下長江一帶に於ける各貿易港に於ける貿易概況を申上げますと、

(一)、上海 (Shanghai)

(甲)、地勢、沿革、人口其他 上海は、揚子江の一支流たる黃浦江の左岸に在り、又上海港は右黃浦江の一部約十浬を區劃したるものでありまして、海洋からは七十餘浬も距つてゐます爲めに、入港船舶は先づ楊子江の河口より六十浬を溯つて吳淞港に達した上、左折して黃浦江に入り、溯江六浬にして初めて上海港に到着する次第でありまして、相當不便を免れぬ上、其規模も亦上海の發展に副ふことが出來なくなりましたので、現に上海港大築港の計畫が存する斗りでなく、吳淞港に理想的の築港を爲し、同港をして貿易港たらしめん爲め、目下之が工事中なのであります。

次に、上海は往昔之を滬城と稱へ、楚の春申君の居城でありましたところから、一名申城とも呼ぶのでありますが、上海なる名稱は、宋の紹興年間に上海鎭を置き、入港船舶に課稅したるに起源すとのことであります。

然し、貿易港としての歷史は年猶ほ淺いのでありまして、彼の一八四〇年(我天保十一年)の阿片戰爭の結果、一八四二年(我天保十三年)英清兩國間に締結せられました南京條約に依り廣東、厦門、福州及寧波の四港と共に開港せられました後に屬するのであります。

而して現在の上海居住者は、支那人約百六十六萬一千人、外國人約二萬七千人(內日本人一萬五、

六千人）合計約百六十八萬八千人、又外國商社は日本一、一二五。英國二六五。米國二一六。露國四四。佛國四三。葡萄牙三六。其他七四。合計一、八〇三。てありまして、我日本の商社では三井洋行、三菱公司、古河公司、高田商會、大倉洋行、住友洋行、鈴木洋行、江商株式會社、東洋棉花株式會社、日本棉花株式會社、內外綿會社、伊藤洋行、芝川洋行、阿部市洋行、吉田號、渡邊洋行、泰新洋行、西村洋行、日本郵船會社、大阪商船會社、日清汽船會社、天華洋行、正金銀行、朝鮮銀行、臺灣銀行等其主なるものであります。

（乙）、**對外貿易**　上海港の大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額四億二千五百萬兩（海關兩、以下同じ）、輸出額二億一千一百萬兩、輸出入合計六億三千六百萬兩（支那對外總貿易額の四割二分）てありまして、之を前年の貿易額に比較致しますと、輸入額に於て一割一分輸出額に於て八分六厘輸出入總額に於て一割强を孰れも增加致して居るのてあります。

而して、以上は單に當港對外直接貿易額のみを擧げたのてありますから、右の外輸入に於ては、支那諸港より輸入せられたる外國品の價額約六百萬兩を加へ、外國への再輸出額一千四百萬兩及支那諸港への再輸出額二億兩を控除致しますと、結局當港に於ける外國品の純輸入額は二億一千七百萬兩となり、又輸出に於ては、當港より支那諸港へ輸出せられたる土貨の額一億七千三百萬兩中、其等諸港より海外へ輸出せられたるものも多少存する譯であります。

次に前述對外直接貿易額を對手國別に觀察致しますと、

北米合衆國（比律賓群島を含む）	二・七四割	和蘭（蘭領印度を含む）	〇・三〇割
英國	二・三〇	獨逸	〇・二四
日本（臺灣及朝鮮を含む）	一・七〇	白耳義	〇・一〇
英領（香港を除く）	一・〇〇	伊太利	〇・〇七
香港	〇・八四	瑞典	〇・〇二
佛國（佛領印度支那を含む）	〇・五〇	其他	〇・一九

の割合てありまして、右の內獨逸の二分四厘（一千五百五十萬兩）と、白耳義の一分（六百六十萬兩）とは、戰後兩國との貿易關係漸次回復せんとしつゝあるものとして、大に注目に値するのてあります。

尙ほ參考の爲め客大正十一年一月より十月に至る十箇月間に、當上海港へ輸入せられたる主なる獨逸品を擧げますと、

アニリン染料	一、七二二、八二一（海關兩）	洋紙	四二、〇八三（擔）
機械類	四六八、一五五（同）	鐵材類	三二二、六〇五（同）
毛織物類	一、一〇二、八〇六（碼）	亞鉛引鐵材	二一、六三七（同）
人造藍	六〇、四〇〇（擔）	ランターン	二〇一、八四〇（箇）

ビール	三六、七一七（打）	洗面器　二四、〇二九（打）
縫針	八四六、七八〇（千本）	

等でありまして、戰前支那人間に博せる獨逸品の信用は、戰後再び其賣行を旺盛ならしめんとしつゝあるのであります。從つて戰後上海に於て開店せる獨逸商店の如きも、既に三十七の多きを數ふるに至り、獨逸人特有の眞摯なる研究と努力とは、戰時中失ひたる販路を回復せずんば止まざるの概あるのであります。

更に當港に於ける我日本の貿易額を見ますと、米、英兩國に次ぎ第三位を占むるに過ぎぬのであります。

次に、當港に於ける重要輸出入品を擧げますと、

（イ）、輸入品　に於ては棉花、綿絲布及綿製品を始めとし、金屬及鑛產物、機械類、染料、石油、建築材料、紙類等、

（ロ）、輸出品　に於ては、生絲を始めとし、棉花、綿絲布、茶、鷄卵及卵製品、麥粉、種子類、獸皮等、

でありまして、此等の商況に就きましては申上ぐべきことが澤山あるのでありますが、夫では餘り長くなりますから、茲には輸入品の大宗たる綿絲布の商況に就てのみ簡單に申上げますと、次に申上げます同港に於ける工業、就中紡績業の發達特に顯著なる上、支那各地に於ける同工業の發達も亦顯著なる結果と致しまして、本品綿絲布の如きも、太絲及太絲を以て織りたる生地綿布に至りましては、逐年其輸入を減少する斗りでありまして、今後外國品の輸入は、綿絲ならば細絲、又綿布ならば生地物（但し生細綾、生金巾等を除く）よりも順次加工物に移らんとしつゝある斗りでなく、加工綿布と雖も、絲染の變り織、小倉、安物のシャツ地、縞メンネル等は、既に支那品の爲めに驅逐せらるゝ所となり、目下外國より輸入せられつゝありますのは、英米品にては綿イタリヤン、ヴェネシアン、綾繻子、其他極細のシルケット單絲を以て製したる加工綿布類、又日本品にては黑光付ジーンス、鼠色ジーンス、光付金巾、六ッ綾、綢代、五枚繻子、二本綾、更紗、紅金巾、ネル類、ボプリン等でありまして、右の內黑光付ジーンス及光付金巾は英米品を驅逐したるもの、又六ッ綾以下（但し更紗を除く）は日本に於て獨創的に製せられたるものでありまして、孰れも將來有望なる輸入品たるを失はぬのであります。

（丙）、工業　次に上海に於ける工業就中新規工業に就て申上げますと、大體に於て、

○上海に於ける工業

工業名	社數	備考
（イ）、紡績業	（日本五、英國五）（支那一）運轉錘數約一、一一一、〇〇〇　織機臺數約七、二〇〇	

(ロ)、	莫大小業	八〇	
(ハ)、	タオル製織工業	一四	
(ニ)、	製絲（蠶絲）業	七一	釜數
(ホ)、	製粉業	二三	一晝夜の生産能力約
(ヘ)、	搾油業	九	同上 製油 四〇、〇〇〇袋
(ト)、	石鹼製造業	二七	同上 製粕 一七、〇〇〇斤
(チ)、	燐寸工業	五	洗濯用及化粧用 六〇〇、〇〇〇斤
(リ)、	卷煙草工業	一一	
(ヌ)、	皮革工業	一四	
(ル)、	硝子工業	一一	
(ヲ)、	電球製造業	三	
(ワ)、	製紙業	五	
(カ)、	造船業	一五	
(ヨ)、	鐵工業	二四	
(タ)、	製木材業	二	
(レ)、	煉瓦及瓦工業	一〇	
(ソ)、	製帽業	七	
(ツ)、	製藥業	八	
(ネ)、	清凉飲料水製造業	七	
(ナ)、	製氷業	三	
(ラ)、	罐詰製造業	九	

等でめりまして、其他琺瑯鐵器類、文房具類、化粧品類等の製造等も亦相當發達の途にあるのであります。

(丁)、其他 更に、上海に於ける私の所感二三を申上げますと、同地には日本の商店が千以上もあり、中には三井、三菱等の如く支那商を對手に大取引を爲し居る商會も無論尠からぬのでありますが、其大部分は小賣商、然も日本人對手のものに屬するのでありますが、若此等の商店にして支那人をも對手に商賣を致すに於ては、一は日本品の紹介ともなり、意外の好結果を齎らすであらうといふことと、今一ッは、我東京の三越、白木屋とも稱すべき永安公司、先施公司を始めとし、支那の大商店を目擊致しますと、其等の陳列品中には、無論日本品も尠からぬのでありますが、歐米品も仲々尠からず認めますので、日本品の爲めに聊か悲觀せざるを得なかつたのであります。然しこれの

みは、後に支那の奥地を視察致すと共に、支那の文化は未だ〳〵低級であり、從つて日本品の需要も仲々侮り難きものあることを感じた次第であります。

(二)、杭　州 (Hangchow)

杭州は、萬里の長城と共に支那に於ける大工事の雙璧と稱せらるゝ、彼の有名なる大運河の南端に位する、浙江省の首都でありまして、長江沿岸の貿易港ではないのでありますが、上海を距つること僅に百十七哩、急行列車で約四時間半を費すに過ぎぬ開港市場でありますから、序に茲に申上げ度いと思ひます。

(甲)、沿革人口其他　南宋が此所に都して臨安と言ひ、又武林とも稱し、其宮殿樓閣は輪奐の美を極めましたものであります。又蘇東坡の如き詩人が赴任致して文物の中心を成し、更に宋末に及んで岳飛、文天祥の如き忠臣をも出しましたが、時の利は如何とも爲す能はずして、流石の宋も遂に滅亡致し、次て元、明及清を通じて幾度となく兵禍に遭遇致しましたが、其後漸次回復致し、再び今日の繁榮を見るに至つたのであります。

次に此地は、明治二十八年締結の馬關條約に由り翌二十九年に開港場となつたものでありまして、現在人口は約三十五萬餘人と稱せられ、内日本人は僅に四十一二名(排日前は百名以上在りたりと)

に過ぎず、別して商社の如きは、

大東藥房(藥種業)、武林洋行(織布機械商)、眞鍋洋行(同上)、田中政雄(機械類其他)及戴生昌汽船公司(目下蘇州との航運に從事)。

位に過ぎぬのであります。尙ほ當地には我日本租界がありますが、折角の租界も其實我警察署、郵便局(之は其後撤廢)、外數戸あるのみてして、全く草茫々たる原野の感あるのみなのであります。

尙ほ此地は、杭州の西湖か、西湖の杭州かと言はるゝ位、世に著名なる西湖の景勝があり、邦人の遊覽者も相當存するに拘らず、邦人經營の一旅館をすらも有せぬことは、誠に遺憾に堪へぬ次第であります。

(乙)對外貿易、杭州の大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額八萬二千兩(海關兩、以下同じ)、輸出額零てありますが、右は單に外國との直接貿易額のみてありますから、右の外輸入に於ては一旦上海に輸入せられ、同地より水路に依りて輸入せられたる外國品の額七百〇八萬兩及鐵道便に依りて輸入せられたる同上品の額若干(精確なる額は知るを得ざるも大體に於て以上通關貨物の約七割見當なるべしとのこと)及日貨排斥の結果、日本品を一旦上海其他に輸入し、同地に於て商標或は包裝を變更の上支那品として輸入せられたるものも尠からぬ筈てありますから、結局當地に輸入せられたる外國品の實際額は一千數百萬兩に上り居るべく、而して關係當業者の意見に依れば、右の

內我日本品の額は約三分の二を占め居るべしとのことであります。又輸出に於ては前述の如く外國へ直接輸出せられたるものは皆無ではありますが、上海其他を經て輸出せられたるものは無論相當存するのであります。

次に當地に於ける主要輸入品は紙卷煙草、砂糖、石油、染料、海產物、金物等、又主要輸出品は、茶、繭、生絲、絹織物、支那ハム、菜子及菜子粕等でありまして、我日本との貿易關係は、砂糖、海產物、更紗、麻布、ネル、毛織物、手巾、石鹼、燐寸、西洋蠟燭、文房具、玩具、織布機等を輸入せられ、扇子、菜子及菜子粕、綢緞等を輸出せられ居るのであります。

(丙)、工業 此地附近の物產は、蠶絲を第一とし、絹織物之に次ぐのでありまして、右の內絹織物は蘇州及南京と拮抗し、就中寧綢に於ては本場として著名でありまして、前淸時代に於ては蘇州と共に帝室用の織造司があつた程でありますが、其製織方法は未だ家內工業の範圍を脫せぬのであります。其他扇子、麥稈帽子の製造等も盛んでありますが、是亦家內工業に屬するのでありまして、相當規模の新規工業と致しましては、

(イ)、鼎新紗廠（紡績工場にして、錘數二萬）
(ロ)、通惠公紗廠（同上にして、錘數一萬五千）
(ハ)、光華火柴公司（燐寸製造業）
(ニ)、豐和皂廠（洗濯石鹼製造工場）
(ホ)、貧民公廠（同上）

(甲)位のものに過ぎませぬが、然し此等は孰れも同種品の本邦よりの輸入を防遏するに與つて力あるものであります。

(丁)、日貨排斥 當地は學徒の多い土地柄丈に、日貨排斥の氣勢も亦仲々猛烈でありまして、大正八年の夏より大正九年の春に亘りて、中等以上の學生等は、學生聯合會なるものを組織し以て一般輸入貨物に注意し、日本品と見れば直ちに其荷受主に迫りて之を沒收し、又は罰金を强請し、又通關業者に於ても、上海の例に倣ひ日本品の取扱並日本船への積卸を拒絕すべしとの申合せを致した爲め、我日本品を當地へ輸入せんと致すには、一旦上海に於て陸揚を爲し、其包裝並商標を變更の上輸入せられつゝあつたのでありますが、其後日貨排斥の氣勢が柔らぐに伴ひ、通關業者に於ても、前述申合せは未だに取消されぬながら、敢て日本品の取扱を拒絕せざるに至り、學生聯合會に於ても亦、客年四月十日を以て一時的解散を宣するに至り、玆に一段落を告げた次第でありますが、本件日貨排斥の爲めに、從來上海より通航致してゐた、日淸汽船會社其他の內河航行船の航行が中止せられ、且つ日本郵船會社が從來發行し來つた日本より杭州迄の直接ビルヲ發行致さなくなりました爲め(乙)に輸入貿易上未だに其不便を感じつゝある狀態にあるのであります。

(戊、其他　由來當地は、絹織物就中紋織物の名產地でありますから、紋織機の需要は相當額に上り、此等の紋織機は數年前迄は主として我日本より輸入せられつゝあつたのでありますが、右は木製にして且つ案外簡單なる構造に屬します爲めに、其後當地に於ても相當製造せらるゝに至り、頓に輸入額を減じましたが、然も猶ほ年二十萬兩位の輸入を爲しつゝあるのであります。尙ほ目下專ら手織機を使用しつゝありますものが、何れは動力に依る機械を使用するに至る時期の來りますことは、略々想像に難からざる所でありまして、其際は、其等の機械は是非共我邦に於て供給致度、豫め準備の要あるは無論、目下の機械に於ても改良方考案の要あるべき儀と思考せらるゝのであります。

(三、蘇　州 (Soochow)

蘇州も亦長江の貿易港ではないのでありますが、上海よりは僅に五十三哩(汽車にて約一時四十分)、長江にも亦近距離の地にありますのと、彼の馬關條約に由り杭州及沙市と共に外國互市場として開放せられ、我專管居留地も存することでありますから、序に玆に御紹介申上げ度いと思ひます。

(甲、沿革、人口其他　蘇州は古來「上有天堂、下有蘇杭」と謳はれました位、前述の杭州と共に山水絕勝の古都として著名なる上、古來碩儒多く輩出し、加ふるに、此附近一帶の地は非常に豐富の地でありました爲めに、常に南方文華の中心地となりつゝあつたのであります。

(丙)御承知の如く、當地は春秋の頃に於ける吳の國都姑蘇でありまして、彼の吳王が此處に據りて以て越王と覇を爭つた處でありますのと、今一つ「姑蘇城外寒山寺」の古詩とで、本邦人にも好く知られ、上海到來の邦人で此地に杖を曳かぬ者は殆ど無いと申しても可い位なのであります。

然し、古來富有として著名なる土地丈に、彼の長髮賊の亂の際には、一大掠奪の目標となり、城內の三分の二及城外の全部は殆ど燒かれて了ひ、其の結果、城外の商店(主として雜穀問屋)は、現下商工業地として著名なる無錫に移轉して、同地今日に於ける繁榮の素因を爲し、次で革命戰爭の際にも、當地に於ける富有者の多くは孰れも上海に避難致しましたが、其後其等の避難者も漸次復歸したる上、外國商人すらもぽつ〳〵入込むことゝなり、今や同地は商業地としてよりも寧ろ工業地として將來を囑望せらるゝに至つたのであります。

次に、當地の人口は約五十萬と稱せられ、內邦人居住者は約八十名、其他の外國人の居住者は百二三十名でありまして、此等外國人居住者の多くは宗敎關係者なのであります。

尙ほ、當地に在る我專管租界は約十二萬坪を有し、且つ盤門外運河の沿岸に位し、頗る水運に便して居るのでありますが、あたら租界も、我領事館、郵便局(之は其後撤廢)等存するのみでありまして、其大部分は雜草茫々たる空地の儘に遺棄せられつゝありますことは、誠に遺憾に堪へぬ次第であります。尤も我租界に隣接する共同租界(約九萬坪)も亦海關、絲廠等の散點するに過ぎぬの

でありますが、唯此間にありて單り洋務局地界（約八萬坪）のみは、各汽船の埠頭及製絲工場等あつて、相當繁華を爲し居るのであります。

（乙）、對外貿易　蘇州の大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額七萬五千兩（海關兩、以下同じ）、輸出額零でありますが、右の外輸入に於ては、上海其他を經て輸入せられたるもの五百五十萬兩を加へ、支那諸港に再輸出せられたるもの一萬餘兩を控除致しますと、結局當地輸入外國品の額は五百五十六萬兩に上り、又輸出に於ても、當地より外國へ直接輸出せられたるものはありませぬが、上海其他へ輸出せられたる土貨の額一千二百四十四萬兩中、其等の諸港より外國へ輸出せられたるものは相當存する筈であります。

次に、當地に於ける主要輸入品は綿織物、石油、石炭、砂糖等、又主要輸出品は白絲、菜子及菜子粕、綢緞、茶等でありまして、我日本よりは更紗、綿ネル、藥品、海產物、印刷料紙、フエルト帽子、硝子製品等を輸入し、菜子及菜子粕、綢緞、蘭莚、木炭、扇子等を輸出せらるゝのであります。

因に、當地に於ける本邦人商店としては、僅に東洋堂（雜貨）及丸三藥房（藥種）、共和洋行（木炭疊表及扇子等の日本向輸出）位のものでありまして、本邦以外の外國商館も亦亞細亞火油公司、美孚火油公司（以上は石油）及英米煙草公司位のものであります。

（丙）、工業　蘇州及同地方に於ける產物は米（年產額七百萬石）及雜穀（年產額菜子二三百萬石、小麥百萬石、其他）、繭、生絲、絹織物、綿絲布、燐寸、板紙、扇子、蘭莚、刺繡等でありまして、內新規工業に屬するものは、

○蘇州に於ける新規工業

（イ）、蘇綸紗廠（洋紗）	職工	一、七〇〇	
（ロ）、蘇經絲廠（生絲）	同	八二六	
（ハ）、延昌恒絲廠（同）		六〇〇	
（ニ）、恒利絲廠（同）		五〇〇	
（ホ）、鴻生火柴公司（燐寸）	職工	六五〇	
（ヘ）、燮昌公司（同）	同	五〇〇	
（ト）、華盛板紙公司（板紙）	同	一五〇	

因に蘇州に於ける邦人經營の工場を擧げますと、（イ）橋本紐釦廠（ドブ貝を剝拔きて日本に送るもの）、（ロ）中華物產公司（蓆莚製造）、（ハ）瑞記公司（膠製造）等であります。

（丁）、工業地としての蘇州　蘇州は將來工業地として有望なりとは、在蘇州帝國副領事其他に依りて熱心に唱導せられつゝある所でありまして、茲に其意見の大要を申上げますと、上海の地價は黃浦江向の浦東あたりに於てすら一畝（約二百坪）四千兩（上海兩）も致し、然も工場に適當なる土地を得るに困難なるに引代へ、蘇州に於ては一畝僅に二百元見當にして、然も工場適當地に豐富にして、水運並に水質も好く、殊に勞働者は夥多にして勞銀も從つて安く、即ち筋肉勞働者は日に三十

仙（大洋）、紡績女工も同三十仙、生絲女工の熟練者にして猶ほ最高三十八仙に過ぎぬ。唯缺點とも稱すべきは、原料を蘇州地方に仰ぐことの出來ぬ工業は、上海を經て之を輸入し、又其製品も上海に輸出せざるべからざることなるも、之とても上海蘇州間の運賃の如きは、石炭一噸に付一元、綿絲一俵に付六十仙といふ程度に過ぎぬ故、大して考慮するに當るまへとのことであります。

何れに致せ、蘇州に於ては現在と雖も相當大規模の工場が設立せられ居り、且つ目下計畫中に屬するものも存するとのことでありますから、幸に同地が工場地として發展し、我專管租界十二萬坪の如きも、之を有利に利用せらるゝに至らむことは、吾人の希望に堪へざる所であります。

（四、南　通（昔の通州）（Tung-chow）

南通（昔は通州と稱せり）は、別に貿易港ではありませぬが、上海より約九十浬を距つる長江の北岸に位し、彼の支那現代の老政治家にして且つ一代の事業家たる張謇翁の熱心なる指導と經營とに依り、過去十數年間に能く今日の如き教育、實業並社會事業の顯著なる發達を來たし、且つ所謂「支那の新しき村」として將來を囑望せられつゝある地でありますから、序に茲に御紹介申上げ度いと思ひます。

尤も此地は私の旅程の都合上、直接視察致すことを得なかつたのでありますが、幸ひ客年の夏私が上海の總領事館にゐます際、船津總領事、横竹商務官等が、張謇翁の還曆の祝宴に臨席せられました序を以て、同地に於ける各般の狀況を詳細調査致されましたので、私の茲に申上げますのは、單に右御話のお取繼に過ぎぬことをお斷り致して置きます。

（甲、面積及人口　南通全縣の面積は七千四百三十五支里でありまして、人口は或は百六十萬と稱せられ、或は百二十五萬と號せられますが、事實は百三十萬近くであらうとのことであります。

（乙、自治制度　南通縣が初めて自治制を布きましたのは、前清宣統二年でありまして、全縣を二十一區に分ちたることがありましたが、中途にして之を廢し、民國九年十一月一日に至り新に現在の自治會制度を實施致したものでありまして、同會の會員たるものは、南通縣内に三年以上居住する二十一歳以上の公民にして、

（イ）、中等程度以上の學校卒業者。

（ロ）、直接國税十元以上を納むるもの、或は價格五千元以上の不動産を所有するもの。

（ハ）、自治に關する經驗成績あるもの。

の中より定員五十名（商會より六名、農會、教育會より各五名、各市區より二十六名、各村落より八名）を選擧し、會の執行機關として七名の理事、及代理機關として一名の理事長を置き、而して會員及理事は總て名譽職にして無報酬なのであります。

次に自治會は、國家の法令の認むる範圍内に於て、全縣に亘り教育、實業、交通、水利、土木、衞生、慈善、公共事業に關すること及法令又は行政官廳の委任による事務を司り、又自治會の經費は、公有財産より生ずる收入、附加稅、公費及臨時の必要に應じて募集する公債を以て之れに充て、更に全縣の永久的利益に關する場合、災害の救濟、債務の償還等の目的の爲めには、公債を募集することをも得るのであります。

而して、成立後年猶ほ淺き自治會の事業として注意に値すべきものは、城壁を撤廢して其跡を道路となし、且つ取崩されたる古煉瓦を以て發電所を建築したること、及地方の富力を集注して生産的事業に投じ、其利益の一部分を以て自治會の事業を助長せんとする計畫で、現に二百萬元の公債を發行したことであります。

(丙)、産業 南通全縣は由來肥沃なる平原でありまして、棉花、雜穀等農産物に豐富なる上、大規模の開墾事業(資本金約七百五十萬元)に依つて、農産物並鹽の産額を增加しつゝあり。殊に棉花の如きは米國棉を移植改良して以來、頓に其品質を高め、且つ産額も亦平年約七十萬袋(一袋は百二十斤)に達してゐるのであります。

更に工業に至つては、張謇翁の最も力を注いだ所でありまして、光緒二十五年唐家閘なる一寒村に大生紡織公司を創立致し、歐米の新式機械を裝置して大規模の紡績織布を開始して以來、幾多の工業相次で興り、今や南通工業の中心地となつたのであります。

(イ)、大生紡織公司(資本金二百萬兩、錘數七萬〇一百八十錘、織布機四百臺にして、同公司は又楊子江口の三角洲たる崇明島に、資本金百二十萬兩、錘數三萬〇二百錘の分工場及海門常樂珍にも錘數三萬六千錘、織機四百臺の分工場を有す)。

(ロ)、廣生油廠(資本金三十萬兩にして、年三十萬石の棉子油を産す)。

(ハ)、阜生蠶桑公司(資本金八萬元にして、一箇年間に四千數百匹の絹布を産す)。

(ニ)、資生鐵廠(資本金二十萬兩)。

(ホ)、復新麵廠(資本金三十一萬元、一箇年間の製粉高五十萬袋)。

(ヘ)、通明電燈公司(資本金六萬兩、馬力七十五、重油機を裝置す)。

(ト)、大達公司碾米廠(資本金五萬元)。

等でありまして、以上は主として張謇翁の創立に係り、尙ほ右の外最近張孝若氏の設立に係る南通綉織公司、建築公司等があります。

(丁)、商業及金融 前述の如く、農工業の發達顯著なるに連れ、上海を始め各地との商業漸次殷盛となり、當地よりは農産物及工業品を輸出し、日用品及工業用機械類の輸入をなしつゝあり、又金融機關の如きも、各有力銀行の支店がありまして、各地間との取引上不便を感ぜぬのであります。

(戊)、**教育**　も亦張謇翁の意を注ぐ所でありまして、學校には、

(イ)、紡織專門學校（校長張謇及張詧）。
(ロ)、私立醫學專門學校（校長同上）。
(ハ)、南通大學農科（校長同上）。
(ニ)、通海商業私立商業甲種學校（校長同上）。
(ホ)、代用師範學校（校長張謇）。
(ヘ)、第七中學（校長中介臣）。
(ト)、私立乙種農業學校（校長張謇及張詧）。
(チ)、女子師範學校（校長馮女史）。
(リ)、女工傳習所（校長余沈壽女史）。
(ヌ)、盲啞學校（校長張謇）。

等ある外小學校の如きは全縣に亘りて三百以上に達し、尙ほ博物苑圖書館等も存するのであります。

(巳)、**社會事業及病院**　社會事業も亦張謇翁の熱心なる注意と犧牲とを拂ひつゝある所でありまして、其主なるものには養老院、育嬰堂、貧民工廠、金沙貧民工廠、殘廢院、濟良所、棲流所等あり、又病院には南通醫院及基督醫院があります。

(庚)、**娯樂機關**　には、學校教育以外戲劇を利用して一般民衆の風俗改良及愛國心の涵養に資せんとする張謇翁の高遠なる理想の下に設立せられたる「更俗劇場」在り、且つ右劇場の俳優を養成せんが爲めに、是亦翁の設立に係る伶工學社即ち俳優學校の存するのであります。

以上申述べましたる通り、翁の献身的努力と犧牲とは常人の到底企及し得べからざるものあり、從つて翁の施設の下にある南通住民は、各其分に安んじて業を勵み、且つ共助の精神を以て益々全般の繁榮を致しつゝあるのでありまして、「南通に泥棒と乞食なし」の稱あるも亦故なきに非る儀と思考せらるゝのであります。

尙ほ前述張謇翁の嗣子張孝若氏は曩に北京政府より歐米日本各國實業考察使專使に任命せられ、本邦には來る三月頃到來の筈であります。

(五)、鎭　江 (Chinkiang)

(甲)、**沿革、地勢、人口其他**　鎭江は、三國の時吳の孫權が一時此處に都城を築きて居たることあり、後南宋には徐州といひ、隋には潤州と稱したる地でありまして、長江の南岸（上海を距ること百六十五浬）に位し、上海より長江を溯江すれば最初に到着すべき、所謂長江の咽喉を扼する重要なる開港場たるのみでなく、此地で長江を横斷する彼の大運河の主要港でもあるのであります。

次に當地は、彼の天津條約に由り一八六一年（我文久元年）に開港せられたのでありまして、其後津浦鐵道及滬寧鐵道開通の爲め大運河の利用減少したること、蘇州及南京の開港せられたる爲め當港の貿易區域を狹少せられたること及鎭江前面に横はる泥沙州が逐年擴展するのみなる爲め當港に於ける繫船並貨物の積卸上非常なる不便を感ずるに至りたる等、各種の事情の爲め當港は相當打擊を蒙りつゝあるのでありますが、然も猶ほ長江沿岸諸港中漢口及南京に次ぐ重要貿易港たるに恥ぢぬのであります。殊に當地の商人は、我大阪の商人と其性質相酷似し、當地に於て修業すれば一人前の商人と稱せらるゝ程、商業上活氣ある土地なのであります。

而して當地に於ける人口は約十七萬と稱せられ、內歐米人、約百名又本邦人は三十一名（戶數九戶）でありまして、我居留地も亦僅に二百支那畝に過ぎぬのであります。尙ほ當地には我領事館はなく、南京領事館の管轄に屬してゐるのでありますが、客年春以來泰來館といふ邦人經營の旅館の開業せられたことは、邦人客に取り便宜尠からぬのであります。

（乙）、對外貿易　當港に於ける大正十年對外直接貿易額は、輸入額五百五十七萬兩（海關兩、以下同じ）、（前年と略同額）、輸出額三十五萬兩（前年に比し二割三分增加）、合計五百九十二萬兩でありまして、右の外、輸入に於ては上海其他の支那諸港を經て輸入せられたるもの一千〇三十五萬兩を加へ、支那諸港へ再輸出せられたるもの九十四萬兩を減じますと、結局外國品の純輸入額は一千四百九十八萬兩により、又輸出に於ても上海其他へ輸出せられたる土貨の額三百六十二萬兩中、其等諸港より外國へ輸出せられたる額も若干存する筈であります。

次に大正十年の貿易額を對外國別に比較致すことは、之が統計を缺く爲めに不可能でありますが、關稅（復進口稅を含む）納付の割合は、

英國五割、　米國三割二分、　日本一割八分、

となつてゐます。

更に當港に於ける主要輸出入品は、輸入に於ては綿布、石油、金屬及同製品、海產物及砂糖等、又輸出に於ては小麥、小麥粉、胡麻、胡麻油、落花生、絹織物等でありまして、我日本よりの主要輸入品は綿製品、化粧品、洗面器等であります。

因に當地に於ける歐米商館は太古、怡和の兩汽船、亞細亞及美孚の兩石油及英米煙草の各出張所等、又邦人經營のものとしては日淸汽船の出張所及前田洋行、德生洋行、大通洋行（以上雜貨）、旭壽堂（賣藥）等であります。

（丙）、工業　次に當地に於ける工場を擧げますと、

（イ）、日本燧生燐寸公司（大正十年六月の開業にして、目下三百名の職工を使用し、一日約四十五六噸の燐寸を製造しつゝあり）。

(ロ、支那)榮昌火柴公司（職工數二百五六十名にして、一日の生產高燐寸約四十噸）。
(ハ、支那)大源油廠（大豆油の製造にして、職工數六十七名）。
(ニ、支那)貽成公司（製絲工場にして職工數約六十名）。
(ホ、支那)富潤絲廠（今より二十五六年前に創業せられたる製絲工場にして、職工約百七八十名に上る）。
(ヘ、支那)永利絲廠（兩三年前に創業せられたる製絲工場にして、職工數略同上）。

等でありまして、右の外最近某邦人にして鷄肉の罐詰工場設立を計畫しつゝありとのことであります。

(丁、**鎭江港の將來**　前にも一寸申上げて置きました通り、鎭江前面に於ける泥沙州擴展の爲め、長江に於ける汽船航行の水流が、漸次鎭江の對岸に向つて移動しつゝある結果を致し、鎭江海關の如きも勢ひ對岸に移動の必要生じつゝありとのことでありますから、將來鎭江の商工業は恐らくは對岸に移動するに至るべく、從つて邦人の如きも、今より豫め對岸に向つて着目し置くの要あるべき儀と思考せらるゝのであります。

尙ほ私は鎭江に參つた序を以つて、彼の有名な運河を實見旁た對岸なる楊州に到りましたが、目下同地には邦人としては支那鹽務署顧問の高洲太助氏が在住せらるゝのみでありまして、本邦とは甚だ緣が薄いやうでありますが、流石に人口十萬の都會丈けありまして本邦品も相當に需要せられ、隨つて日貨排斥當時には、學生其他に依つて相當宣傳も行はれたとのことでありまして、今猶ほ橋梁其他に筆太に記された「勿用日貨」の文字を認むるのでありますが、唐代の名僧にして本邦へも渡來したことのある鑑眞和尙の爲めに、我常盤博士と前述高洲師との協力に依り、舊臘三日其寺跡たる法淨寺內に見事な石碑を建てられたことは、當地人に對し尠からぬ好感を與へたとのことであります。

(六)、南　京(Nanking)

(甲)、**地勢、沿革、人口其他**　南京は、前述鎭江より長江を溯ること四十七浬（鐵路にては四十二哩餘）の南岸に位する開港場でありまして、城內繁華の地點は繫船地たる下關（しやくわん）より約七哩を距つて居るのであります。

次に當地は、往昔六朝の舊都でありまして、歷朝其名を異に致し金陵、秣陵、建業、建康等の稱呼あり、明の太祖亦都城を卜して應天府と稱へましたが、後成祖の時都を燕京に移してより、自ら南の舊都を南京、北の新都を北京と稱するに至り、更に淸朝に至つては江蘇、安徽及江西三省の首府となし江寧府と稱しましたが、一八五三年（我が嘉永六年）に至り、彼の長髮賊の占據する所となり、太平王洪秀全の居城たること實に十三年、其間不規律にして橫暴なる賊兵の爲めに富豪と申す富豪は孰れも掠奪を蒙らざるはなく、良民亦四方に逃避致して、數百年來の繁榮華美一朝にして零落し盡し、而して賊亂の平定後四十年、其一半は漸くにして人家を以て充たさるゝに至りました

が、又も第一次革命戰爭の際には、張勳の固守する所となり、次で第二次革命戰爭の際には、河海鳴の死守する所となり、共に支ふること能はずして陷落致した爲め、又々多大なる損害を蒙りました結果、今猶ほ城内數哩に亘つて田園竹籔の相交はるを見、殊に故宮附近の如きは、一望唯瓦礫の累々たるを見るのみでありまして、轉た當年に於ける市街戰の慘狀を忍ばしむるのであります。

而して現下當地の人口は約三十九萬と稱せられ、内本邦人數百五十五名（戸數四十一戸）、其他の外人數約四百名であります。

（乙）、對外貿易　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額八百二十七萬兩（海關兩、以下同じ）輸出額二百五十二萬兩、輸出入總額一千〇七十九萬兩でありまして、之を前年に比較致しますと、輸入額に於て八割八分を增加し、輸出額に於て六割四分を減少致し、而して右の内輸出額の減少は、大運河及淮河一帶の各地方に於ける大洪水の爲め各種農產物の激減を來したるに基因する儀と考へられます。

但し以上は對外直接貿易額のみを擧げたのでありまして、右の外、輸入に於ては上海其他の支那諸港より輸入せられたる外國品の額一千四百七十一萬兩を加へ、外國及支那諸港へ再輸出せられたる額二十八萬兩を控除致しますと、結局當港に於ける外國品の純輸入額は二千二百七十萬兩と認められ、又輸出に於ても上海其他の支那諸港を經て外國に輸出せられたるものも相當存する筈であります。

次に當港大正十年に於ける對外國別輸出入額は、之が統計を缺くが故に不明なるも、關稅（復進口稅を含む）納付の割合は、

英國七割四分、　日本一割六分、　米國六分五厘、　佛國三分、　和蘭四厘、

となつて居ります。

更に當港に於ける主要輸入品は綿絲布を始めとし、各種金屬及同製品、石油、砂糖、紙卷煙草等でありまして、本邦よりは雲齊布、綿織絲、銅、繻子（帽子の材料となるもの）、人力車用タイヤー莫大小地、陶器等輸入せられ、又主要輸出品は雜穀、獸皮、葉煙草及刻煙草、絹織物、扇子等でありまして、内本邦への輸出品は絹織物其他であります。

因に當港に於ける外國商館は、美孚洋行及亞細亞火油公司（以上石油）、英美煙公司（煙草）、祥泰木行（木材）、人壽保險公司（生命保險）等、又邦人店舗は前田洋行、吉村洋行、篠崎洋行、伊藤洋行等の雜貨店及三星洋行（煙刀を始め麥酒、サイダー、味の素等取扱）であります。

而して當地に於ける本邦商の言に依れば、木綿織機は元本邦より輸入せられたるも、近年は當地にて製造するに至り、又人力車（當地に約四千五百臺あり）用タイヤーは、戰時中には約七分通り本邦品を以つて占めゐたるも、現在は約三分位となり、更に靴下、タオル、石鹼等は、支那品の爲めに壓迫を蒙りましたが、唯名古屋製陶器及主として帽子の材料に供せらるゝ本邦製繻子みのは、

賣行相當可なる趣であります。

(丙)、産業　南京地方に於ける重要産物は、米と絹織物とでありまして、目下一部米國人中運河附近の米作改良を計畫しつゝありとのことでありますから、若し右計畫にして成就致した曉には米穀の增收に寄與する所あるべく、又絹織物は所謂南京繻子の名に依りて我邦にも古くより知らるゝ所でありまして、現在機臺六千臺、從業者約六七萬人、年産額約六百萬元に達して居るのであります。但し其織法は何れも舊式に屬するのでありまして、之は將來必ず革新の時期に到達すべき儀と考へられます。更に新式工場に至りましては、南京機器局、南京造幣廠、南京印刷廠及江蘇省立工場（第一乃至第十工場）位のものでありまして、此間外人經營に係る和記洋行（インターナショナル、エキスポートコムパニー）の罐詰及冷藏工場のみが、單り異彩を放つてゐるのであります。尤も此工場も戰時中は歐米諸國に對し盛んに軍需品を供給し、頗る好況を呈したとのことでありますが、最近は餘り振はない樣子であります。

斯くの如く南京に於ける工業は、殆と舊式の絹織物業に限られてゐる觀があるのでありますが、右不振の原因としては、屢次の戰亂に打擊を蒙りたることを始めとして、工業の主要原料たる石炭の高價なること等を數ふべく、而して當地に於ては工業發達の見込がないかと申しますと、必ずしもさうとは限りませぬので、土地及勞銀の低廉なること、女工等の器用なること等は、確に或種工

業の創立に有利なのでありまして、現に製絲工場建設の計畫せられつゝあることをも耳に致しましたし、又當地商務總會長の如きは、都市改良の計畫と共に工業促進策に腐心しつゝある次第でありますから、將來或は相當發展の機運に逢着するかも知れぬのであります。

因に、本邦人中當地で工場を經營しつゝある者は勿論、何等投資者をも見ないのでありまして、曩に某公司が、支那側の希望に依り水道設立の見積を致したことがありましたが、それすら、支那側で借款を嫌ひ自ら設立することとなりました爲めに、其儘になつて了つたとのことであります。

(丁)、南京の將來　南京は元は工業地として知られてゐたのでありますが、近年は寧ろ商業地として有望視せらるゝに至り、殊に將來寧湘鐵道完成の曉には、一層當地の商業を發達せしむることゝ考へます。唯茲に一つの問題は、南京の對岸で津浦鐵道の發着地たる浦口が、最近非常なる勢を以つて發展しつゝあることでありまして、出盛り時同地に集散する貨物は、一日二千噸乃至二千四百噸に及び、更に將來信陽州より浦口に至る浦信線敷設の曉には一層同地の發展を來すであらうとのことでありまして、南京の商工業は漸次同地に移轉せられんとしつゝあることであります。

(七)、蕪湖(Wuhu)

(甲)、沿革、地勢、人口其他　蕪湖は一八七六年（我明治九年）の英清條約に基き、一八九七年（我明

治三十年)以來開放せられたる貿易港でありまして、前述南京より五十二浬上流の長江南岸に位し、安徽省の門戸を扼し且つ東西交通の要路に當り居るのでありまして、人口は約十三萬七千と稱せられ、內邦人數は八十九名に過ぎませぬが、客年一月以來我領事館も開設せられ、邦人經營の旅館も二軒から存するのであります。

(乙)、**對外貿易**　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額二百九十一萬兩(海關兩、以下同じ)輸出額九十六萬兩、輸出入總額三百八十七萬兩でありまして、右の外輸入に於ては、上海其他の支那諸港より輸入せられたる外國品の價額九百六十四萬兩を加へ、上海、漢口等の諸港に再輸出せられたる外國品の價額六萬兩を控除致しますと、結局外國品の輸入總額は一千二百四十九萬兩に上り、又輸出に於ては上海其他の諸港を經て海外に輸出せられたる額も相當存するのであります。

而して以上の對外直接貿易額を前年の同貿易額に比較致しますと、輸入額に於て八分四厘、輸出額に於て四割八分を增加致して居ります。

次に同年の對外國別貿易額は不詳でありますが、關稅(復進口稅を含む)納付額割合は、英國五割八分八厘、　日本三割〇三厘、　米國一割〇三厘、　佛國六厘。となつて居ります。

更に當港に於ける主要貿易品は、輸入品に於ては綿絲布を始めとし、金屬及同製品、ガンニー囊、石油、燐寸、砂糖、卷煙草、蠟燭等、又輸出品に於ては菜子及其他の雜穀、鐵鑛石等でありまして、其他海外輸出は禁ぜられて居りますが、當地方產の米は蕪湖米として著名でありまして、支那各地への重要輸出品(年輸出額九百萬擔內外に達す)なのであります。

而して本邦よりの輸入品は、生金巾、生シーチング、晒金巾、生ジーンス、生天竺、綿絲、莫大小地、腿帶子等、又本邦への輸出品は、鐵鑛石、菜子等でありまして、本邦品中、化粧品を始め靴下、タオル等の綿製品は、近時支那に於ける工業勃興の爲め、殆ど支那品の爲めに壓倒せられ、又莫大小肌衣類は莫大小地を輸入して之に加工し、更に靴下留の如きも亦謨謨入紐を輸入して之に加工することゝなり、尙ほ染料、藥品、縫針等の如きも亦獨逸品の爲めに打擊を蒙りつゝあるとのことであります。

因に當港に於ける邦人商館は三井洋行支店(主として砂糖の輸入及菜子の輸出を取扱ふ)、三菱洋行支店(主として大冶鐵鑛の運搬を取扱ふ)、日清汽船會社出張所、森洛事務所(桃沖鑛山業)、前田洋行(雜貨商)、丸三洋行(賣藥商)及鹽岡洋行(雜貨及賣藥商)であります。

(丙)、**產業**　蕪湖附近一帶は、土地沃肥にして農產物の豐饒なること支那に冠たりと稱せらるゝ丈に、農產物には頗る豐富でありますが、工業就中新規工業に至りましては、大昌(燐寸製造工場にして一日二千哥の製造能力を有す)及裕中(紡績工場にして、資本金百萬弗)の二個に過ぎず。尤も右

の外樟腦工場（華順公司）及硝子工場（明々硝子廠）が各一個宛ありましたが、前者は既に閉鎖し、後者は目下中止中であります。

(丁)、蕪湖の將來　津浦鐵道の敷設以來、安徽平原の物產は凡て淮河に因りて臨淮關に出で、同地より鐵道にて浦口に出づることゝなりたる爲め、蕪湖の地位は漸次地方物資の集散市場に變化するに至り、加ふるに戰時中旺盛を極めたる菜子其他の雜穀の輸出が、戰後遽に衰退を來しつゝある爲め、貿易港としての當地の將來に就ては寧ろ危憂せられつゝある狀態であります。

尙ほ當地に於ける本邦品の販路擴張上不便を感じつゝあることは、金融機關の缺如せることでありまして、本邦郵便局の撤廢後は特に其不便を感ぜらるゝ次第であります。

(八)、九　江 (Kiukiang)

(甲)、沿革、地勢、人口其他　九江は唐代に於ける潯陽の地でありまして、明初に九江府を置き、其後德化縣となり、民國三年更に九江縣に改められて今日に至つたのであります。尙ほ九江の名稱は江水此處に九分せる爲め斯く名づけられたものとのことであります。

次に當地は、一八五九年（我安政六年）の天津條約に依り、一八六〇年（我萬延元年）一月に開設せられたる、長江南岸（前述蕪湖よりは百八十一浬上流の）の貿易港でありまして、人口は約六萬と稱せられ、內本邦人は大正九年夏頃迄は百四五十名に上つてゐましたものが、翌十年春には九十二三名に減少致しましたが、目下は又百十名に增加致し、更に本邦人以外の外國人數は約百名であります。

尙ほ當地は、咸豐年間に於ける粵匪の亂には、久しく賊徒の據る所となり、且つ其際兵燹に罹りました爲めに、城內甚だしく荒廢致し、今猶ほ轉た往時の盛時を偲ばしむるものがあり。近くは客年八月二日にも兵士の給料不渡より動亂を生じ、火災の害をも蒙つたのであります。

(乙)、對外貿易　當地は江西省唯一の開港場たる關係上、同省物產の輸出並同省に於て消費せらるゝ物資の輸入は、主として同港よりせらるゝのでありますが、對外直接貿易は主として上海を經由して行はれます關係上、當港大正十年に於ける對外直接貿易額の如きも、輸入額百八十三萬五千兩（海關兩、以下同じ）、輸出額二千兩、輸出入總額百八十三萬七千兩に過ぎぬのであります。然し右の外輸入に於ては上海其他の諸港を經て輸入せられたる外國品の額一千一百八十五萬八千兩を加へ、漢口其他の支那諸港へ再輸出せられたる額四十五萬三千兩を控除致しますと、結局外國品の總輸入額は一千三百二十四萬兩により（前年の同輸入額に比較するも大差なく）、又輸出に於ては上海、漢口等の支那諸港へ輸出せられたる土產品の額一千八百六十二萬兩中、其等諸港を經て海外へ輸出せられたる額も尠からぬのであります。

次に同年の對外國別貿易額は不詳でありますが、關稅（復進口稅を含む）納付割合は、

英國六割八分九厘、　日本二割六分一厘、　米國五分、

となつて居ります。

次に當港に於ける輸入品の大宗は綿絲（綿絲の海外よりの直接輸入額は印度產一三、二五六擔及日本產三、八二一擔でありますが、右以外上海其他の支那諸港を經由して輸入せらるゝもの及上海其他製綿絲の輸入額も尠からぬのであります）でありまして、次で生金巾、晒金巾及其他の綿布、石油、砂糖等、又輸出品の主要なるものは、茶を始めとし、白麻、葉煙草、磁器、樟腦、鑛石、石炭等でありまして、本邦よりは綿絲、綿布、砂糖、陶磁器用顏料及金水（本邦製顏料は當地に於て相當聲價を有す）等輸入せられ、白麻、樟腦、鑛石等輸出せらるゝのであります。

因に目下當地に於ける本邦商館は、臺灣銀行、日清汽船會社、平和公司（陶磁器顏料及金水の輸入販賣）、草葉公司（同上）、宮崎洋行（樟腦の輸出）、田中洋行（茶油の輸出）、仁德洋行（洋雜貨販賣）、萬歲洋行（寫眞販賣）、丸三洋行（賣藥）等でありますが、大正十年春迄は茂木洋行、齋藤洋行（以上白麻の輸出）、伊藤洋行（葉煙草の輸出）、新利洋行（雜穀及肥料）、鈴木洋行（樟腦）等の支店或は出張所があり、相當活氣を呈しつゝあつたとのことであります。

尙ほ當地に於ける歐米商館は、怡和洋行及太古洋行の兩汽船會社、美孚洋行及亞細亞火油公司の兩石油會社及英美煙公司（煙草）であります。

（丙）、產業　九江地方に於ける產物は、米、茶、白麻、葉煙草、麻布、皮紙、磁器、樟腦、水藍、鑛石等でありまして、九江燒として世に周知せらるゝ磁器は、其實景德鎭の生產に係るものであります。次に當地に於ける新規工業は、

（イ）、裕生火柴公司（燐寸製造にして、一日の生產高五十哥入五六十箱）。

（ロ）、利豐麵粉廠（小麥粉の製造）。

（ハ）、華發皂廠（石鹼製造）。

（ニ）、松大仁記皂燭廠（同上）。

でありまして、右の外彼の張勳等の關係ある久興紡績股分有限公司に於て、目下資本金百十萬兩、錘數一萬五千三百錘、織布機三百臺の紡績工場建築中（機械類も米國に注文中）であります。

而して以上は何れも支那人經營に係るものゝみでありますが、右の外日支合辨とも稱するもの二三と、當地に近き廬山に Daffs Dairy Farm と稱する英人經營の罐詰工場（ハム、バタ、ジャム、果實、肉類等の）があります。

（丁）、其他

（イ）、當地方は鑛物の產地として有望視せられて居ります。

（ロ）、目下九江南昌間に通ずる南潯鐵道は、江西省鐵路の一部でありまして、我東亞興業會社の借款

資金に依り邦人技師の手にて敷設せられたるものであります。

(ハ)、江西人は概して陰險古陋にして他人の事業を防害する癖があるとのことであります。

(九)、漢　口 (Hankow)

(甲)、**地勢、沿革、人口其他**　漢口は、前述九江よりは百五十七浬、又上海よりは約六百浬の上流たる長江の北岸にして、漢水の正に長江に注がんとする所にあり（漢口の名亦漢水の口との意より出でたるものとのことであります）。斯くて右漢水を劃して漢陽に對し、又長江を隔てゝ武昌に望み、更に京漢鐵道の發着點でもあるのであります。

斯くの如く當地は、支那に於ても頗る重要の地位を占めつゝありますので、支那人は呼むで九省の會といひ、外人亦東洋のシカゴと稱するのであります。

然し、當地の前述の如き發展も、其實彼の天津條約に依り一八六二年（我文久二年）に開港せられた後に屬するのでありまして、夫以前は僅に漢陽及武昌の餘澤に依りて存在せる、一商埠地に過ぎなかったのであります。

次に當地の人口は約八十七萬と稱せられ、內本邦人二千四百十四人、其他の外國人二千百六十八人でありまして、市街は之を大別して支那市街及外國租界となし、右外國租界中には約五萬坪の本邦租界も存するのであります。

(乙)、**對外貿易**　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額四千七百四十七萬兩（海關兩、以下同し）輸出額一千〇二十五萬兩、輸出入總額五千七百七十二萬兩でありまして、右の外輸入に於ては上海其他の支那諸港を經由して輸入せられたる外國品の額三千〇五十一萬兩を加へ、海外及支那諸港へ再輸出せられたる額一千四百五十萬兩を控除致しますと、結局當港へ輸入せられたる外國品の價額は六千三百四十八萬兩となり、又輸出に於ては當港より上海其他の支那諸港へ輸出せられたる土貨の額七千七百七十八萬兩中、其等諸港より海外へ輸出せられたる額も相當存する儀と考へられます。

而して當年の對外貿易額を前年の同貿易額に比較致しますと、輸入額に於て一割一分を增加し、輸出額に於て九分六厘を減少致して居ります。

次に當港大正十年に於ける對外國別輸出入額割合は、

○漢口對外國別輸出入額割合

輸入

(イ)、日本	三・三三割	
(ロ)、米國	二・七一	

輸出

(イ)、日本	四・六七割	
(ロ)、英國	三・二五	

(ハ)、香港	一・九三	(ハ)、獨逸	〇・五九
(ニ)、英國	〇・九八	(ニ)、米國	〇・四七
(ホ)、新嘉坡	〇・三二	(ホ)、和蘭	〇・三四
(ヘ)、蘭領印度	〇・二〇	(ヘ)、伊太利	〇・二六
(ト)、白耳義	〇・一七	(ト)、佛國	〇・二三
(チ)、加奈陀	〇・一三	(チ)、白耳義	〇・一一
(リ)、佛國	〇・〇九	(リ)、香港	〇・〇七
(ヌ)、獨逸	〇・〇五	(ヌ)、其他	〇・〇一
(ル)、其他	〇・〇九		

の割合でありまして、右の内獨逸が輸出に於て第三位、輸入に於て第十位を占むるに至りましたことは、對獨貿易の漸次回復に向ひつゝあるものとして、大に注意に値する儀と考へられます。

更に當港に於ける重要輸出入品の、大正十年に於ける輸出入額順位は、

○漢口港に於ける重要輸出入品輸出入額（大正十年）

重要輸入品	輸入額	重要輸出品	輸出額
(イ)、綿織物	一五、七六六千海關兩	(イ)、油類	一一、〇四六千海關兩
(ロ)、砂糖	九、七五九	(ロ)、雜穀類	七、六七九
(ハ)、石油	八、六四八	(ハ)、煙草	六、三四八
(ニ)、銅製品	八、〇二五	(ニ)、綿絲	六、〇六七
(ホ)、染料及塗料	四、五八八	(ホ)、卵製品	五、一三六
(ヘ)、鐵道材料	四、四八二	(ヘ)、鐵類	四、七三三
(ト)、綿絲	三、六七九	(ト)、牛皮	三、八三二
(チ)、機械類	二、五三二	(チ)、杉材	三、三二八
(リ)、鐵製品	二、〇二〇	(リ)、麻類	三、〇〇八
(ヌ)、海產物	九二四	(ヌ)、生絲	二、八〇三
(ル)、洋紙類	八二七	(ル)、粕類	二、七五一
(ヲ)、電氣材料	六八〇	(ヲ)、藥材	二、七二五
(ワ)、鐵力板	六五八	(ワ)、毛皮類	二、五五九
(カ)、靴下	五九〇	(カ)、生漆	一、八八八

重要輸入品	輸入額（千海關兩）
(ヨ)、紙卷煙草	五七一
(ヨ)、繭紬	一、八三二

であります。

(イ)、綿絲　當地方は概して太番手の市場であるが、太番手物は近年支那に於ても盛んに紡績せらるゝに至りたる爲め、今や其壓迫を蒙り、綿絲の輸入としいへば、殆んど細番手物に限らるゝに至り。

(ロ)、綿布　生地綿布中ジーンス或は生金巾等の如き高級品(細物)の賣行は相當良好なるも、ドリル或はシーチングの如き下級品（太物）は、支那に於ける紡績業の發達の爲め漸次窮境に陷り、又加工綿布に於ては、桃山式上布の如きは支那製品の爲めに、又晒金巾、綿繻子等の如きは英國品の爲めに逐年需要減退の傾向にありますが、染色細綾、染天竺又は絣天竺、六綾、交織カルセ地、五枚繻子、更紗、ネル、色染別珍等は相當賣行を示しつゝあるのであります。

(ハ)、砂糖　漢口市場に於ける砂糖は、香港糖（精糖、白糖、赤糖各種共）、日本糖（精糖のみ）及支那糖（四川より來るものと、汕頭より來るものとあり）でありまして、内香港糖は最も勢力を占め、日本糖亦侮り難きものがあるのであります。而して砂糖の支那に於ける需要は、逐年增加するのみでありますから、將來共有望品の一たるを失はぬ儀と考へられます。但し支那市場に於て香港糖と競爭せんが爲めには、或は上海あたりに於て砂糖工場設立の必要が生ずるやも計られぬとのことであります。

(ニ)、銅　は財界變動前に於ては日本產銅が相當輸入されたのでありますが、目下は殆んど米國產銅の獨占狀態となつて了つたのであります。

(ホ)、染料及塗料　は主として歐米品でありまして、日本品としては僅に黑色硫化染料位のものであります。

(ヘ)、洋紙　は日本品が優勢であります。

(ト)、海產物　は日本品が大部分を占めてゐます。

(チ)、一般雜貨　は洋傘、置掛時計、陶器、洗面器、硝子器、洋燈口金、護謨靴、太絲（裝飾用又は頭髮締用等）、縫針等、目下猶ほ相當賣行を示しつゝあるのでありますが、右の内洋傘、洗面器、硝子器等の如きは、下級品ながら支那に於てもぼつ〳〵製造せらるゝに至り、又縫針の如きは獨逸品がそろ〳〵輸入せられつゝあるのでありますから、何時迄も樂觀を許さぬのであります。更にタオル、ハンカチーフ、靴下、毛絲加工品、腿帶子、石鹼、香水、香油、白粉、文房具、貝釦、鏡（安物）、齒刷毛、レース絲、絹團扇、玩具等は、支那製品の壓迫の爲めに逐年輸入減退の傾向にあるのであります。

因に當地に於ける外國商館は、日本七六、英國五〇、米國二五、獨逸一七、佛國一一、其他一七、合計百九十六でありまして、內本邦商館の主なるものを擧げますと、橫濱正金銀行、臺灣銀行、住友銀行、三井洋行、三菱洋行、大倉洋行、高田商會、久原商事株式會社、鈴木洋行、江商株式會社、富士公司、吉田洋行、伊藤忠商事株式會社、岩井商店、武林洋行、日淸汽船、日本郵船、大阪商船等の各支店或は出張所等であります。

(丙)、製造工業　由來通商區域の廣大なる當港に集散する各種原料品の豐富なるに加へて、水には楊子江並漢水の航運あり、陸には又京漢鐵道並粵漢鐵道の車便あり、而して勞働階級に屬する人口稠密にして、且つ一般勞銀低廉なる等の諸關係より、當地に於ける工業は着々として發達致し、就中其顯著なるものは紡績工業でありまして、試みに當地及對岸武昌に於ける其主要なるものを擧げますと、

(イ)、楚興公司紡沙廠（在武昌。錘數九萬）。
(ロ)、漢口第一紡織股份有限公司（在武昌。錘數四萬四千にして更に四萬の增加計畫中）。
(ハ)、裕華紡織股份有限公司（在武昌。錘數三萬）。
(ニ)、震寰紡紗公司（在武昌。錘數三萬）。
(ホ)、新申第四紡織廠（在武昌。錘數一萬五千）。

であります。前述第一紡織の增錘をも完成の曉には、漢口及武昌に於ける綿絲生產高は年二十六七萬俵に上り、裕に漢口及同地方の需要を充し得るに至るべしとのことであります。

尙ほ前述工場中、裕華及新申には織布工場を所持しませぬが、楚興には六百餘臺、第一紡織には五百臺、震寰には三百臺の織機を有し居るのであります。

更に當地に於ける各種製造工業の主なるものを擧げますと、

(イ)、漢冶萍漢陽鐵廠（製鐵業。在漢陽）。
(ロ)、楊子機器廠（船舶諸機械其他製造業。在漢口）。
(ハ)、燮昌洋火廠（燐寸製造業。在漢口）。
(ニ)、謝榮肥皂洋燭廠（石鹼及蠟燭製造業。在漢口）。
(ホ)、裕隆麪粉廠（製粉業。在漢口）。
(ヘ)、寶善碾米廠（精米業。在漢口）。
(ト)、福和搾油廠（豆油粕等製造業。在漢陽）。
(チ)、造幣廠（貨幣鑄造。在武昌）。

其他數十に上り、何れも支那人の經營に屬するのでありますが、歐米人の經營に係る工場も亦和記洋行廠以下二十餘を算し、更に邦人經營のものにも亦、

(イ)、三井澄油廠（桐油其他の精製）。
(ロ)、日華澄油廠（桐油の精製）。
(ハ)、同搾油廠（豆油粕及棉實油粕製造）。
(ニ)、三合玻璃工場（硝子製造）。
(ホ)、泰孚腿帶子工場（腿帶子織造。但し目下休業）。
(ト)、中華製氷株式會社（製氷）。
(ト)、大正電氣株式會社（電燈供給）。
(チ)、清喜洋行穀粉工場（製粉）。

等であります。

（十）、岳　州（Yochow）

（甲）、沿革　地勢、人口其他　岳州は古の巴陵郡でありまして、宋以後に至りて始めて岳州の名あり、而して現在は巴陵縣の首府にして人口約六萬を有するのであります。

次に當地は一八九八年（我明治三十一年）支那自ら開放した貿易港でありますが、然し稅關及居留地は、楊子江と洞庭湖口との交叉點に位する城陵磯（岳州の一部にして人口約一萬を有す）といふ處

に在るのでありまして、其處には我日清汽船の出張所があります。尤も邦人關係のものとては之位のものでありますが。

更に此地は、前述漢口よりは長江を溯ること百二十六浬にして達し、又湖水を溯ること八十九浬にして長沙に、更に湖水を横切ること百二十九浬にして常德に達するのであります。

（乙）、對外貿易　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額僅に一萬一千兩（海關兩、以下同じ）、輸出額零でありますが、右の外、輸入に於ては上海、漢口等を經由して輸入せられたる外國品の價額四百三十一萬兩を加へ、長江諸港へ再輸出せられたる額二萬七千兩を控除致しますと、結局外國品の輸入總額は四百二十九萬餘兩となり、又輸出に於ては上海、漢口等へ輸出せられたる土貨の額六百二十一萬兩中、其等の諸港より海外へ輸出せられたる額も相當存する儀であります。

次に當港同年に於ける對外國別貿易額は不明でありますが、關稅（復進口稅を含む）納附の割合は英國五割八分九厘、日本三割八分七厘、米國三分四厘であります。

更に當地に於ける主要貿易品は、輸入品に於ては綿布、石油、綿絲、砂糖等、又輸出品に於ては、桐油、水牛皮及黃牛皮、水銀、麻、牛脂、雜穀、木油、漆、藥材等であります。

（丙）、岳州と常德　岳州稅關を經由する貨物の集散市場は、常德を始めとし、津市、益陽、岳州等であり、就中常德は次に述ぶる長沙に亞ぐ湖南省の大市場でありまして、同地に集散する物產は、岳州

輸出品の大半を占め、輸入品の大半亦同地に於て消化せらるゝのであります。從つて岳州貿易は主として常德貿易なりとも稱せらるゝのでありまして、岳州には我日清汽船の出張所が存するのみなるに反し、常德には三井洋行、日華製油其他の出張員が約十名も居住し、盛んに桐油、雜穀等の買付に從事しつゝある狀態なのであります。故に常德には近く稅關の設置を見るに至るべしとの說さへあるのでありまして、若し右說にして實現せらるゝが如きことあらむか、岳州港の貿易額は爲めに激減を來すに至るべく、殊に岳州は軍事上樞要の地位にある爲めに、屢々戰亂の災害を蒙りつゝあるに反し、常德は之なきに加へて、物資の豐富を以てせるが故に、購買力も亦從つて多く、輸入貿易上より見るも、將來有望地たるを失はぬのであります。

斯くの如く、岳州貿易が將來常德に移轉する時期のあるべきは略々想像に難からざる所でありますから、本邦當業者も豫め同地に於て相當地盤を堅め置くの要あるべき儀と思考せらるゝのでありますが幸ひ同地の商人は、非常に堅實性を帶び居るとのことでありますから、將來の販路開拓上にも便宜尠からぬ儀と考へられます。

○(十二)、長　沙(Changsha)

(甲)、地勢、沿革、人口其他　長沙は湖南の省城でありまして、湘江の東岸に位し、前述岳州よりは水路八十九浬、鐵路にて九十五哩を距つのであります。而して當港は一九〇四年(我明治三十七年)の開港に係り、目下の人口は約五十萬と稱せられ、內邦人は二百九十二名に上つて居るのであります。

次に漢口より同港に至る交通系統を申上げますと、其一は漢口湘潭線汽船に依り、漢口より先づ長江本流を溯り、次で岳州を經て洞庭湖を橫切り、更に湘江を溯りて長沙に達するのでありまして、其間二百十一浬、航程約三日間を要し、每年十二月より翌年三月に至る減水期を除くと、概ね一千噸級以上の汽船を通じ得るのであります。而して現在同航路に從事しつゝある汽船會社及汽船は、

○漢口湘潭線汽船會社及汽船

(イ)、日清汽船會社汽船—武陵丸(七一五噸)及沅江丸(四九五噸)。
(ロ)、太古洋行汽船—吉安(七二九噸)及湘潭(同上)。
(ハ)、怡和洋行汽船—昌和(六九六噸)。

であります。第二は漢口より長江對岸の武昌に渡り、同地より粵漢鐵道に依り長沙に達するのでありまして、其間二百二十哩、行程約十五時間を費すのであります。

而して私の長沙に參つたのは、客年十一月九日でありまして、當時は河南省に數千の土匪が出沒しゝあつた上、長沙にも亦省長兼司令たる趙恒暢に爆彈を投じた者があつて、四圍の物情騷然たる

時期でありましたので、漢口の知人の注意もあり、最初は汽船で赴く豫定でゐました所、生憎便船の都合が惡るかつた斗りに、知人の所謂不愉快にして且つ不安なる汽船に乘つて參りました所、果して知人の言の通り、一等室、二等室の差別なく、兵士等が吾先にと侵入し來つて身動きもならぬ上、岳州其他では亦多勢の兵士が手荷物の檢査に參る等、終夜一睡だも貪ることを得ざる目に遭遇致したのでありますが、一面から考へますと、其爲めに支那內地に於ける汽車の實狀を目擊致すと共に、非常なる高賃銀を徵しながら然も收益の擧らぬ所以を初めて了解致した次第であります。

(乙、對外貿易　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額百三十五萬一千兩(海關兩、以下同し)、輸出額四千兩、合計百三十五萬五千兩でありますが、右の外、輸入に於ては上海、漢口其他の支那諸港を經由して輸入せられたる外國品の額一千二百七十萬兩を加へ、上海、漢口其他の支那諸港へ再輸出せられたる額十六萬兩を控除致しますと、結局當港に於ける外國品の總輸入額は一千三百八十九萬兩となり、又輸出に於ては上海、漢口等の支那諸港へ輸出せられたる土貨の額一千百二十五萬兩中、其等の諸港を經て海外へ輸出せられたるものも相當存する筈であります。

次に當港同年に於ける對外國別貿易額は不明でありますが、關稅(復進口稅を含む)納付の割合は英國七割一分、日本二割八分七厘、米國三厘であります。

更に當港に於ける重要貿易品は、輸入品に於ては綿絲布、銅及其他の金屬、石油、砂糖、染料等、又輸出品に於ては鑛物(鉛、安知母尼、亞鉛及タングステン等)、鉛、安知母尼、棉實、雜穀等であります。

本邦よりは綿絲布、銅、硫化曹達、硫化染料等輸入せられ、鉛、安知母尼鑛、豚毛、棕梠毛、人髮、雨傘、雜穀等輸出せられつゝあるのであります。尙ほ最近に至り染料、縫針等の獨逸品もぼつ〳〵輸入せられつゝあることを認むるのであります。

因に當地に於ける本邦商館は三井洋行(土產品の輸出並銅の輸入)、山本洋行(高田商會及大倉洋行の代理店)、中島洋行(豚毛及棕梠毛の輸出)、古川洋行(同上)、新利洋行(同上)、大石洋行(雜貨)小嶺洋行(同上)、鹽川洋行(同上)、杏林堂(藥種)等であります。

(丙、產業　長沙地方の產物は、雜穀、鑛物、金屬、紙、棕梠毛、豚毛等でありまして、就中鑛物及金屬に於て著名であります。次に長沙に於ける新規工業を擧げますと、

(イ、第一紡紗廠(省有のものを華實公司が借受け經營)。
(ロ、湖南陸軍工場機械廠。
(ハ、華昌公司煉廠(資本金二千萬元の安知母尼精煉工場にして、該株主は孰れも土地に於ける有力實業家なるも、大正九年以來休業しつゝあり)。
(ニ、黑鉛煉廠(湖南省鑛務局の經營)。
(ホ、造幣廠。

（ヘ）、麓山玻璃廠（之は小規模のものに過ぎず）。

等でありまして、以上は孰れも支那側の經營に屬するものゝみでありますが、右の外邦人經營のものには、

（イ）、長江玻璃公司（一名長江硝子株式會社にして、盛時は從業者二百數十名に上れり）。

（ロ）、大同煉廠（春原工學士經營）。

がありましたが、共に經營難の爲め目下中止せられつゝあります。

（丁）、**長沙の將來其他**　當地附近は革命以來屢次の戰亂の爲めに人民の疲弊甚しきものあり、金融の如きも極端に逼迫しつゝありて、自然對外貿易にも惡影響を及ぼしつゝある狀態でありますが、若し今後平和狀態にして相當年間持續し、更に粤漢鐵道の完成をも告ぐるに於ては、將來尙ほ有望の貿易港たるを失はぬ儀と思考せらるゝのであります。

○（十三）、沙　市（Shasi）

（甲）、**沿革、地勢、人口其他**　沙市は一名沙頭又は荊沙とも稱へ、前述岳州の上流百八十三浬、又次に述ぶる宜昌へは八十三浬の、長江北岸に位し、且つ往時春秋楚國の舊都たりし荊州とは殆んど街續きをなしてゐます所から、當地は右荊州の關門として重きをなされ、而して其最も殷賑を極めましたのは、彼の長髪賊が金陵即ち南京を陷落致した時でありまして、當時四川往來の船舶は、髪賊の危險を恐るゝの餘り、何れも當地より以東に航じなくなりました爲めに、百貨一時に此地に聚合致し、意外の隆盛時代を現出致しましたが、一八七七年（我明治十年）宜昌の開港と共に、巴蜀との連絡は宜昌の爲めに奪はるゝ所となり、次第に衰微するに至りました所、偶々明治二十八年の馬關條約に依りて當地も亦開港せられるゝに至り、稍々見るべきものあるに至つたのでありまして、現下人口約十三萬と稱せられ、內邦人數三十九名（大正五六年頃には五六十名にも上りゐたりと）でありまして、我領事館及租界（約十三萬坪）もありますが、可惜租界も徒らに支那の百姓、船頭、苦力等の居住に放任せられつゝある斗りでなく、河水の爲めに年々浸蝕せられつゝある狀態であります。尙ほ當地には邦人經營の旅館とては一軒もありませぬ。

（乙）、**對外貿易**　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額四十二萬兩（海關兩、以下同じ）、輸出額僅に二百十三兩に過ぎぬのでありますが、右の外、輸入に於ては上海、漢口等の支那諸港より輸入せられたる外國品の額三百六十六萬兩を加へ、宜昌其他に再輸出せられたる額四萬六千兩を控除致しますと、結局外國品の輸入總額は四百〇三萬餘兩（昨年に比し約百萬兩增加）となり、又輸出に於ては漢口其他の支那諸港へ輸出せられたる額百八十八萬兩中、其等の諸港より海外へ輸出せられたるものも若干存すべく、尙ほ當港に輸出入せらるゝ貨物中、民船に依りて運搬せられ、稅關

を經由せざるものも相當存するのでありますから、當港の實際の輸出入額は、前述の額よりも幾分多い譯であります。

次に當港同年に於ける對外國別貿易額は不明でありますが、關稅(復進口稅を含む)納附の割合は、英國六割四分五厘、日本三割五分三厘、米國及佛國各一厘であります。

更に、當港に於ける主要貿易品は、輸入品に於ては綿絲布、石油、砂糖等、又輸出品に於ては棉花桐油、蠶豆、豌豆、胡麻及其他の雜穀、菜子粕等でありまして、右の內輸入品は、當地の支那商人が上海及漢口より直接購入販賣するもの多きを占むるのでありますが、輸出品中には邦商にて買付輸出するもの相當額を算するのであります。

因に當地に於ける邦商は吉田洋行出張所(棉花及穀肥の輸出)、日本棉花株式會社出張所(棉花の輸出)、瀛華洋行(棉花及穀肥の輸出)、鴨川洋行(雜貨販賣)、三和洋行(同上)、同善藥房(賣藥)、東孚洋行及日濟汽船出張所でありまして、右の外近年迄は安部洋行及武林洋行の出張所もあつたのでありますが、右は其後引上げて了つたのであります。

又當地に於ける外國商館は、太古、怡和の兩汽船會社、美孚、亞細亞の兩石油會社、英美煙公司及安利英行であります。

(丙)、工業 當地に於ける工場とては普照電燈公司、信義麵廠、雲錦布廠、貧民工廠及職工十名內外を使用する靴下工場約十箇所斗り存するのみでありまして、甚だ振はず。況んや邦人經營のものなどは一箇所もないのであります。

○(十三)、宜昌(Ichang)

(甲)、沿革、地勢、人口其他 宜昌は一名夷陵とも稱し、一八七七年(我明治十年)芝罘條約に基いて開放せられたる貿易港でありまして、前述沙市よりは八十三浬の上流北岸に位し、恰も四川省に上下する貨物の中繼港となつてゐますので、同港に輻輳する汽船及民船の數は實に多大に上り、一見其の隆盛を想はしむるものがあるのであります。當當地は、去る大正九年十一月三十日午前一時に突發致した、近畿第十八師團長王懋賞部下の大兵變の爲めに、埠中目拔きの場所は悉く殺傷掠奪の災厄を蒙り、一時は復活の見込覺束なしと迄稱せられました上、翌大正十年六月三日午後十時又復兵變が勃發致し、掠奪放火等の慘害を蒙り、更に同年夏秋に及んでは、川鄂戰爭の爲めに修羅の巷に化する等、數度の戰亂の爲めに外國人の大部分は孰れも當地を引上げ、支那商民も亦轉地して難を避くる等、一時は始んど火の消えたる如き狀態となり、商引取の如きも亦殆ど中絕の有樣であつたのでありますが、幸ひ昨大正十一年に入り、各外國人及支那人の建造致した宜昌重慶間大型汽船の航路が開始せらるゝと共に遽に活氣を呈し將來とも囑望せらるゝに至つた次第であります。

次に當港の人口は約五萬人と稱せられ、內邦人は八十九名でありまして、領事館は勿論、一軒の邦人旅館も存するものであります。

(乙)、對外貿易　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額四十三萬兩（海關兩、以下同じ）、輸出額零でありますが、上海、漢口等より輸入せられたる外國品の額五百十萬兩を加へ、重慶其他への再輸出額五百十四萬兩を控除致しますと、結局外國品の純輸入額は三十九萬兩となり、又輸出に於ては、當港より漢口其他へ輸出せられたる土貨の額百三十八萬兩中、其等諸港より海外へ輸出せられたるものも若干存する筈であります。

要するに當港の貿易は中繼を主とするのでありまして、右中繼貿易額は外國品五百十四萬兩、土貨一千〇〇九萬兩、合計一千五百二十三萬兩に達してゐるのであります。

次に前述直接輸入額の國別を申しますと、香港八割四分七厘、日本五分一厘、米國二分一厘、佛國二厘の割合となつて居ります。

更に當港に於ける重要貿易品は、輸入品に於ては綿布、綿絲、石油、砂糖、卷煙草、海產物、鍼力板、鐵釘等、又輸出品に於ては漆、雜穀、靑麻、漆油、棉花等でありまして、我日本よりは生並晒金巾、ジーンス、綿絲（細番手物）、タオル、洋傘、綿毛布等輸入せられ、漆、雜穀、靑麻、木炭等輸出せらるゝのであります。

而して當地に於ける本邦品の商況は、綿布は生地物は約六割、又縞物は約五割以上を占め、綿絲中細物は殆ど日本品でありまして日光、水月、丹鳳等の賣行好く、更にタオル、洋傘、綿毛布等亦好評でありますが、唯靴下類、石鹼類等は殆ど支那品の爲めに壓倒せられつゝある狀態であります。

尙ほ當地に於ける需要品は、一般に中以下の品位に屬するものであります。

因に當地に於ける主なる邦商は、大正元洋行（綿絲及雜貨の輸入）、水田漆行（生漆の輸出）、大日本漆公司（同上）、瀛華洋行（綿花の輸出）天華洋行及日淸汽船會社の兩出張所でありまして、右の外丸三洋行（賣藥及雜貨小賣）、日漢洋行（同上）、丸生洋行（同上）、福壽洋行（雜貨小賣）、東隆洋行（同上）、及石垣洋行（雜貨及食料品小賣）等の小賣商店が存するのであります。

(丙)、工業　當地に於ける工業とては、宜昌光明電燈有限公司の外、土法に依る木油搾油工場十一軒存するのみであります。

(丁)、宜昌の將來　要之、當宜昌は四川貿易の發達と共に漸次發展するに至るべく、尤も右は中繼港としての發展でありますから、工業の如きも將來造船業の發達を來すことゝ考へらるゝのであります。

十四、重　慶 (Chungking)

(甲)、沿革、地勢、人口其他　重慶は一名渝城と稱し、四川省東川道巴縣管內に在り、前述宜昌よりは

三百七十浬、又長江々口よりは一千三百六十浬の上流、長江と嘉陵江との合流點に位し、人口は對岸の江北市と合せて約三十萬と稱せられ、内邦人五十三名、邦人以外の外國人約百四十名でありまして、本邦側としては帝國領事館及邦人經營の旅館もあり、且つ帝國軍艦鳥羽も日本租界の前面に淀泊以て警備の任に當り居るのであります。

次に當地は、一八七六年（我明治九年）の芝罘條約に基き、一八九一年（我明治二十四年）開放せられました、四川省唯一の通商港にして且つ長江上流最終の通商港でもあります爲めに。今や世界列强の注視の的となりつゝあるのであります。

尙ほ宜昌重慶間の航路に就きましては、前に申述べて置きました通り、世界の難航路と稱せらるゝに拘らず、本航路に從事しつゝある汽船會社は都合十五社、汽船數亦二十隻（八千五百餘噸）に上つて居るのであります。從つて各社間に運賃の競爭を惹起するは、寧ろ必然の勢でありまして、之が防止の爲めに定められた運貨協定の如きも、其實名義のみに止まり、各社間の競爭は依然として行はれつゝあるのであります。試みに一般貨物運賃の標準品たる綿絲の運賃に就て見るに、客年四月には一俵（三百二十斤）十二兩なりしもの、六月末より七月初に掛けては最低一兩半迄暴落致しましたが、九月初よりは三兩、六兩、八兩、十二兩、十四兩、十八兩と漸次騰貴致して、十一月上旬の最終航路には二十四兩に迄も暴騰致したのであります。

斯くの如く、當航路に從事しつゝある各汽船は、相互間の競爭存するに拘らず、非常に高率なる運賃を收めつゝあるのでありますが、中には尙ほ飽くことを知らずして、禁制品たる阿片の密載を敢てしつゝある汽船さへ存するのでありまして、中法公司（表面の國籍は佛國なるも、事實は支那人所有）汽船鴻江が大正十年の最終航路に阿片を滿載してゐたとかで十萬兩の罰金と當分の營業停止を喰ひ、又大來洋行（米國）汽船大來喜が客年春の初航に是も阿片を積載してゐたのが發覺して五萬兩の罰金と六箇月の營業停止を喰つた等は周知の事實であります。

而して私の宜昌より溯江致しましたのは、客年十月二十二日天華洋行の行地丸に乘じてゞありまして、路中三泊（本航路は夜中の航行不可能にして夜間は夔州府、萬縣等に淀泊するのであります）の上二十五日無事重慶に到着、同地に八日間滯在の上、十一月二日出帆の日清汽船會社汽船雲陽丸に乘じて下江致したのでありますが、當航路は非常なる急流でありまして、到る處に急潭や隱れ岩やがありまして、頗る危險でありますが中にも、最も危險とせられ居りますのは、彼の所謂三峽の險灘でありまして、宜昌迄は極めて平凡でありました長江も、宜昌よりは遽に一變致して、左右に屏風の如くに屹立する巨岩怪石の間を、恰も矢を射る如くに流るゝのでありまして、進むに隨つて難破民船の破片や、水夫の溺死體なんどを認むるは未だしも、或は民船に向つて兵士の發する銃聲を耳にし、甚だしきは、吾人に向つて銃先を擬する暴兵にすら遭遇致したのであります。尤も當時は

戰亂も既に終熄致してゐましたので、無事湖江を得ました樣なものゝ、遂ひ夏頃迄は我行地丸、雲陽丸の如きは屢々銃丸を見舞はれ、就中雲陽丸の如きは死傷者すらも出したのであります。尙ほ重慶に上陸の際など、武裝致した兵士が旅客の手荷物を一々檢査しつゝある有樣は、恰も戒嚴令でも敷かれある感をせらるゝのであります。

(乙)、對外貿易　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額六十六萬兩（海關兩、以下同じ）、輸出額四十六萬兩、合計百十二萬兩でありますが、右の外、輸入に於ては漢口、宜昌等の支那諸港より輸入せられたる外國品の額一千一百八十七萬兩を加へ、宜昌及萬縣への再輸出額一萬兩を控除致しますと、結局當港に於ける外國品の總輸入額は一千二百五十二萬兩となり、又輸出に於ては漢口其他の支那諸港に輸出せられた土貨の額一千八百餘萬兩中、其等諸港を經て海外に輸出せられた額も尠からぬ儀と考へられます。尙ほ同年の輸出入貿易額を前年の同貿易額に比較致しますと、輸入、輸出共に著しく增加致して居るのであります。

次に當港に於ける主要貿易品は、輸入品に於ては綿絲（印度綿絲の輸入高は四萬一千擔にして前年に比し二萬七千擔を減少し、又日本綿絲の輸入高は一萬二千擔にして前年に比し一萬餘擔增加）、綿布（生金巾七萬六千餘疋、晒金巾二十二萬八千餘疋、ジーンス二萬一千餘疋、更紗三萬三千餘疋、染色綿布六萬三千餘疋等）、石油（二百四十五萬餘米ガロン）、銅（一萬六千餘擔）、紙卷煙草（一千五百七十七萬本）、海產物等、又輸出品に於ては生絲（一萬〇九百擔）、豚毛（一萬擔）、山羊皮（二百十四萬餘枚）、苧麻（三萬八千擔）、苧麻布（一萬二千擔）、五倍子（一萬四千餘擔）、大黃（七千擔）、製藥（二百十九萬兩）、棕梠毛（六千擔）、羊毛（四千擔）、羽毛（三千擔）、石炭（千七百噸）、雜穀等でありまして、右の內輸出品は各國商人に依つて輸出せらるゝのでありますが、輸入品の多くは、重慶商人が上海へ年中店員を派遣し置き、同地に於て直接買付くるのであります。

因に當地に於ける邦商は、森村洋行（輸出入貿易）、新來洋行（同）、若林洋行（藥品販賣）、日清汽船會社出張所及天華洋行出張所であります。

(丙)、產業　由來四川省は支那の寶庫と稱せらるゝ丈に、其產物は頗る豐富でありまして、試みに四川省に於ける主なる產物を擧げますと、

繭（四川省に於ける年產額二百二十餘萬斤）、生絲（三萬五千瓲乃至四萬擔）、米（約五千四百萬石）、小麥（約一千萬石）、大麥（約三百萬石）、大豆（約五百餘萬石）、豌豆（約六百餘萬石）、蠶豆（約七百五十餘萬石）、家畜類（山羊、牛豚等）、獸皮（山羊皮約二萬擔、牛皮約二萬五千擔）、豚毛（約三萬擔）、牛角（約三萬擔）、羊毛、鹽、砂糖（約百五十萬擔）、茶（約五百餘萬貫）、煙草（約五百餘萬貫）、桐油（平作にて十六萬擔、上作にて三十五萬擔）、木油（柏樹の果實より搾取するものにして、一萬擔乃至一萬三千擔）、牛油（五、六萬擔）、白蠟（約二萬餘擔）、石炭（約四、五十

萬斤)、五倍子(約三萬擔)、大黄、麝香(約三千斤)、鑛物(各種)、紙、棕梠絲(約二萬擔)、果物、漆、絹織物、棉花(約九百萬貫)。

等でありまして、就中鑛產物の如きは恐らく無盡藏なるべしとのことであります。尤も之は交通の發達せざる限り、其採掘覺束なき儀ではありますが、

次に重慶及同附近の新式工業を擧げますと、

(イ)、生絲工場　又新、黻川、肇興、生泰、天福、謙吉祥、同孚、懋康及天成の九工場。

(ロ)、燐寸工場　有鄰公司、森昌泰、豐裕公司、福興、瑞興及振業の六工場。

(ハ)、石鹼工場　樂山廠及祥合慶の二工場。

(ニ)、硝子工場　鹿嵩玻璃廠。

(ホ)、製氷工場　和孚。

備考、以上の內又新及有鄰は日支合辨にして、其他は何れも支那人の經營に係る。

其他數戶の靴下製造業及官營たる重慶銅元局等であります。而して私も生絲工場、石鹼工場等を視察致しましたが、建築、設備等誠に好く整つてゐると感じた次第であります。

尙ほ當地方に於ける人口の饒多なること、工業原料品の豐富なること、勞力の豐富且低廉なることは將た市場の廣大なること等は將來に於ける當地の工業發達上資する所尠からざるべく、殊に石鹼、刷毛砂糖等の製造工業の如きは、原料其他の關係上相當有望なるべき儀と思考せらるゝのであります。

(丁)、重慶の將來　重慶は其家屋の構造、體裁等より、一見頗る有福なることを想像せらるゝに拘らず、其實意外に疲弊しつゝあるとのことでありますが、之は屢次の戰亂の爲め軍費の誅求過大なると(稅金の如きは向ふ十數箇年分を前納せしめられつゝありと)、匪徒の刼掠暴戾なる等に基因するのでありまして、若し平和狀態として今後二三年間持續するに於ては、現下の疲弊も容易く回復し得らるべしと稱せらるゝ位、地方物資が豐富なのであります。

斯くの如く、當地方は目下意外に疲弊しつゝありとはいへ、從來の慣習上其需要する物品は寧ろ優良品を主としつゝありとのことでありますから、若し本邦品の輸入を試むる場合に於ても相當優良品の選擇を要する儀と考へらるゝのであります。

何れにするも、同地方に於て平和狀態の持續することは、輸出入貿易上誠に希望に堪へざる所でありますが、新聞の所報に依れば、四川省も亦々戰亂の舞臺となりましたとの事、度し難きは支那の軍人であります。

尙ほ四川貿易上看過すべからざる一事は、汽船と民船との關係でありまして、之は長江上流に於て古き歷史を有する民船が、近年激增せる高速汽船の爲めに、其積載貨物を奪はるゝのみならず、屢々沈沒の災厄にすらも遭遇せしめらるゝ所から、彼等の汽船に對する反感は著しきものあり、曩

に聚福洋行の福源が、從來民船に積載せられつゝありし鹽を積載せる爲め彼等の反感を買ひ、重慶に於て彼等の襲擊を蒙つたことがありましたが、客年十月私の溯江致した時も、民船側から汽船側に對し、舊曆十月一日より翌年三月三十日迄の間桐油、紙、鹽及砂糖を汽船積になさゞることに抗議中でありまして、之は多分其後汽船側との協定が出來た筈でありますが、若し此等の協定にして不調に終らむか、意外の變事を發生致したかも知れぬのであります。

(戊、萬縣に就て 重慶の序に一言申上度きは、同地の下流百七十五浬の萬縣に就てでありますが、同地は宜昌重慶航路中重慶に亞ぐ大都會(人口十五萬)であります上、桐油の集散地であります爲めに、三井洋行及日華製油株式會社の出張所が設けられてありまして、同地の買付に從事しつゝある所から、同地に於ける邦人の信用並勢力は侮り難きものが存するのであります。

因に同地居留の邦人は、前述三井出張員三名、日華出張員四名、醫師夫妻及郵便局長たる佛國人の妻にて都合十名であります。

尙ほ萬縣に於て私の意外に感じましたことは、同地の軍隊が同地通過の輸出入貨物に對し、樂捐と稱する一種の稅金類似のものを賦課しつゝあることでありまして、右は最初は支那商取扱の輸出貨物にのみ賦課してゐましたのを、順次其範圍を擴張して、目下は支那商の取扱に係ると外國商の取扱に係るとを論せず、所有輸出入貨物に對し一率に之を賦課しつゝあるのでありまして、其賦課の方法の如きも、數名の軍人が自ら船に出張し來り、積荷目錄記載の貨物に對し、樂捐數目單と稱する一種の稅率表の如きものに照して行ふのでありまして、試みに該數目單の一二類を玆に掲げますと、

○樂捐數目單

出口絲綢類

廠絲	毎箱	捐洋三元
皺絲	同	同一元
山絲	毎件	同陸角
川綢	同	同一元
繭殼	同	同三角
亂絲頭	同	同三角
絲棉	同	同三角

進口疋頭棉紗類

棉紗	毎大件	捐洋一元
緞子	毎件	同二元
綢綾	毎箱包	同二元一元
烤緞	毎件	同一元
棉花	毎大包	同五角
絲欄杆	毎件	同五角
金繡貨	毎觔	同一元
布捲	毎捲	同三角
其餘棉毛織物	毎大件	同一元

といつた有樣でありまして、數目單全部の品種は百數十種の多きに上つて居るのであります。

而して右樂捐たるや、無論關稅にも將た釐金稅にも屬せざる一種の軍事費徵收に過ぎざるのであ

りまして、之を輸入品に賦課するが如きは、暴も亦甚しきものと申さねばならぬのであります。

第四、北部支那の貿易

本來北支那と申すのは、直隷、山西、山東、河南、陝西及甘肅の六省を指すのでありまして、右六省中稅關の設けられある開港場とては、直隷省に於ける天津及秦皇島、山東省に於ける芝罘、青島及龍口の五港に過ぎぬのでありまして、其貿易額の如きも、

○北部支那五港に於ける大正十年中對外貿易額（單位一萬海關兩）

港名	輸入額	輸出額	輸出入總額
天津	八、八四〇萬兩	三、八五一萬兩	一二、六九一萬兩
秦皇島	七四一	三三四	一、〇七五
芝罘	七〇一	一、四〇七	二、一〇八
青島	二、三九〇	一、九四〇	四、三三〇
龍口	八	八四	九二
合計	一二、六八〇	七、六一六	二〇、二九六

でありまして、支那全貿易額の一割三分二厘に當り、之を長江一帶に於ける同年の貿易額七億二千萬兩即ち支那全貿易額の四割七分を占め居るに比較致し、甚しき懸隔を示し居るのでありますが、然し北部支那に於ける輸出入品中には、前述の外上海其他の諸港を經由するものが相當存するのでありますから、實際の輸出入額は前述以上相當額に上つて居る筈であります。

尤も北部支那に於ける文化並富の程度を始めとし、人口の密度及交通等に於て、到底南部及中部支那に匹敵するを得ざるは無論ではありますが、然し本來北部支那の地は本邦商品に取り重要なる需要地でありますから、決して之を輕視することが出來ぬのであります。

以後私の視察致した各地の貿易狀況を申上げますと、

(一)、北　京 (Peking)

北京は開市場でもなく、將又物資の集散市場でもなく、何方かといへば純然たる支那全國政治上の中心都市に過ぎぬのでありますが、外國品の消費地としては、相當重要なる地位を占めつゝあるのでありますから、序ながら簡單に申上げますと、

同都は、漢口より京漢鐵道にて七百五十三哩餘、約三十三時間を要するのでありまして、同鐵道は客年十月末及十一月十日前後に、河南土匪の爲めに不通となり、十一月九日に北京を發した汽車の如きは、郾城で約三十六時間も停車し、東方通信主幹の伊達氏の如きは、爲めに危險な思ひをせられた

とのことでありますが、私の漢口から北京に參つたのは、十一月二十日でありまして、前述土匪も大分遠方へ去つた後でありましたから、別に危險とては感じなかつたのでありますが、それでも邦人乘客としては朝鮮總督府の木藤通譯官と二人きりてありましたので、多少の寂しさを感ぜぬでもありませぬでした。

次に、同都は周代の燕の地でありまして、遼、金、元、明、清の五朝茲に都致し、清朝亡び民國成立するに及んで、南方人は頻りに國都を南京に移轉せんことを主張致したのでありますが、其主張を貫徹することを得ずして、北京は依然首都として今日に及んで居るのであります。

而して同都の人口は約九十三萬餘人、內邦人は一千五百六十七人でありまして、其職業別は會社銀行員百〇六人、商店員其他事務員九十三人、學生及練習生七十九人、官公吏四十九人、新聞雜誌記者及通信員四十四人等であります。

尙ほ同都に於ける本邦商社は、銀行には正金銀行其他、又會社には三菱、古川、三井、大倉、東亞興業等の支店或は出張所がありますが、以上は貿易關係と稱するよりも寧ろ借款、企業、御用品の納付等を主とするものであり、又普通店舗の如きも、雜貨商としては加藤洋行、福田義、川崎洋行、東亞公司等、又藥種商としては信義洋行、信昌洋行等に過ぎずして詢に寥々たる感あるのでありますが、之は北京に於ては新に店舗を開くことが甚だ困難なる事情が存するからでありまして、將來其發展の餘地が尠からうと考へらるゝのであります。

(二)、張家口 (Chang-chia-kou)

(甲)、沿革、地勢、人口其他 張家口は一名東口とも呼びますが、これは歸化城を西口と呼ぶに對してのことゝ考へられ、又外國人は一般に「カルガン」(Kalgan) と稱へますが、其語源は露語の「山の入口」といふ意にありとの說があります。

當地は北邊の瘠地でありまして、古代は民戶少き貧寒の部落に過ぎずして何等文化の見るべきものとてはなく、行政上の所屬の如きも、歷朝郡縣の改廢に伴ひ變遷常なかつたのでありますが、然し歷朝が孰れも守備の隊を此處に駐め、以て塞外部落の來襲に備へてゐた事實に徵しますと、地勢上に於ては北方の要害として夙に重視せられつゝあつたことが分るのでありますが、市場と致しては、蒙古との通商開始以來明清兩朝の間に漸次發展し、以て今日の繁榮を見るに至つた次第であります。

而して當地を外國に對して開放致したのは、清朝咸豐十年の北京條約に依り庫倫と共に露國に對して開放致したのに初まり、其後民國三年に至り多倫、歸化城と共に各國に對して自開商埠たることを聲明致し今日に及んだのであります。

尙ほ當地は北京より百十六哩（汽車にて約六時間）の北方に在り、其人口は七萬六千餘人であり

まして、内邦人居住者は三十六名（其他雜穀買付時には三井洋行天津支店、怡豐洋行天津支店等より特に店員の出張を見るのであります）、又邦人以外の外國人は米國人二十二名、露國人二十一名、英國人四名、佛國人二名、諾威人二名合計五十一名でありまして、領事館は米國（大正十年六月開館）及日本（大正十一年三月開館）であります。

（乙）、商業　當地に於ける商業は、内外蒙古及綏遠區域各地に產する穀類、獸毛皮、蘑茹及曹達類を蒐集し以て之を北京、天津方面に移出し、又京津地方より以上各地の需要品を移入供給するを主とするのでありまして、其商圈は頗る廣範に亘つて居るのであります。但し近來京綏鐵道完成の結果として、綏遠地方は直接京津地方と取引せらるゝ傾向を生じましたが、庫倫地方との貿易は、依然として密接の關係を有するのであります。而して此等庫倫地方との貿易は主として隊商に依りて行はるゝのでありまして、毎年三月暖氣に向ふ頃を俟つて、蒙古人向の商貨を牛馬或は駱駝に載せて出發、途中隨所に物々交換を行ひ、牛馬及牛馬皮其他を得て冬季以前に歸還するを常とするのであります。尤も往年庫倫の獨立變亂以來同地間の貿易は殆ど杜絶狀態にある爲め、昔日の繁榮を見ることは出來ぬのでありますが、曠漠たる内外蒙古の大原野は、年と共に開墾せられ、從つて各種の產物は倍々增出し、購買力も亦漸次增加の趨勢にあるのでありますから、若し庫倫地方の安定（是は或は當分不可能と考へられますが）を見るに至らむか、當地の對蒙古貿易は將來其倍々有望なるべき儀と思考せらるゝのであります。

次に當地の貿易能力は、一年に移入額約九百萬兩、移出額約一千五百萬兩を下ちざるべしとのことであります。

移出品の主なるものは、獸毛皮を第一とし、農產物、蘑茹（蒙古特有の菌にして本邦のシメジに酷似して而も香氣を有す）、干葡萄、天然曹達、岩鹽、藥材、生牛等、又、

移入品の主なるものは綿布、綿絲、砂糖、燐寸、煙草、酒、茶、食料品及日用雜貨等であり、更に當地より内外蒙古各地に仕向けらるゝ主なるものは綿布、砂糖、煙草、石油、蠟燭、茶、靴、馬具、銅器等であります。

而して北京及天津地方より當地に移入せらるゝ物品中には本邦品も相當多く、又雜穀、獸皮等にして本邦商人に依りて移出せらるゝ額も亦尠からぬのであります。

因に當地に於ける邦商は三井洋行、怡豐洋行、三昌洋行、義成洋行、興盛洋行、三共洋行、加藤洋行等の各出張所でありまして、概ね雜穀及獸毛皮類の買付を主とし、孰れも當地に取りての重要顧客でありますのと、今一つ當地の支那人は總じて柔順でありまして、外國人に對する感情も亦從つて圓滿である關係上、曾て支那各地に於て排日風潮の猖んなりし時と雖も、當地に於ては何等此種の現象を見なかつたとのことであります。

(丙、工業　當地に於ける工業は天然曹達の精製、製革、製粉、製油、毛毯製造等でありまして、目下は猶ほ幼稚の域を脱せぬのでありますが、製革、製粉等の工業は、將來有望にして發達すべきものと思考せらるゝのであります。

(三、天　津 (Tien-tsin)

(甲、地勢、沿革、人口其他　天津は首都北京を南に距ること八十七哩、又白河々口を溯ること約三十七浬の上流、南北兩運河及氷定河の會流する所に在り、所謂北支那一帶水陸交通の要衝に當る支那第三の貿易港でありまして、上海を距ること七百五十三浬、我長崎を距ること七百九十四浬、又門司を距ること九百四十浬なのであります。

次に天津は周代の幽州の地でありまして、戰國時代に於ては燕に屬し、而して天津の稱あるは、明初天津三衞鎮を設置せるに始まるのであります。爾來各地の民が此處に移住し來りて市街を形成致し、降つて清朝に至りましては衞より州に、更に州より府となり、殊に直隷總督李鴻章が、保定より總督衙門を此處に移し、且つ鋭意商工業の勃興に努力致し、加ふるに一八五八年(我安政五年)英人ロードエルヂンが清國と締結せる所謂天津條約に依りて始めて開港場となりました爲めに、商勢逐年隆盛と相成り、其後彼の義和團の亂の爲めに兵燹に罹りましたが、間もなく鎮定致して舊狀に復し、爾來或は袁世凱の積極的施設、或は日露戰役、或は革命亂等の影響に依り、時に一弛一張を呈しましたが地の利と人の和は遂に今日の隆盛を致した次第であります。

而して當地の人口は約百萬内外でありまして、内邦人數は五千三百六十八名に達して居るのであります。

(乙、對外貿易　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額八千八百四十萬兩(海關兩、以下同じ)(前年に比し二割六分增加)、輸出額三千八百五十一萬兩(前年に比し十一割一分增加)、輸出入合計一億二千六百九十一萬兩(前年に比し四割四分增加)でありまして、右の外、輸入に於ては支那諸港を經て輸入せられたる外國品の額二千八百四十二萬兩を加へ、海外及支那諸港へ再輸出せられたる額三百〇三萬兩を控除致しますと、結局外國品の總輸入額は一億一千三百七十九萬兩に上り、又輸出に於ては當港より支那諸港へ輸出せられたる土貨の額二千五百二十一萬兩中、其等諸港より海外へ輸出せられたるものも亦相當存する儀であります。

次に當年の對外直接貿易額を、支那全國の貿易額に比較致しますと、約八分三厘に相當するのであります。

次に當港に於ける對外直接買易額の割合は、

○天津港大正十年に於ける對外國別貿易額比率

國名	大正十年（一九二一年）	大正九年（一九二〇年）	大正八年（一九一九年）	大正七年（一九一八年）
日本	四割〇八	四割九六	六割五六	七割五八
米國	三・二四	二・二〇	一・七六	〇・六九
英國	一・〇〇	一・二三	〇・四四	〇・二一
香港	〇・九八	〇・八三	〇・七〇	一・〇〇
其他	〇・七〇	〇・七八	〇・五四	〇・五二

てありまして、大正十年に於ける國別貿易額割合を、大正七年の同割合に比較致しますと、日本が七割五分八厘より四割〇八厘に減少致したのに反し、米國は六分九厘より三割二分四厘に、又英國は二分一厘より一割に共に增加致して居るのでありまして、結局戰後に於ける我國の對天津貿易額が逐年減少しつゝあるに反し、米英兩國の同貿易額が逐年增加しつゝあることを認めねばならぬのであります。

次に當港に於ける重要貿易品を擧げますと、

（イ）、輸入重要品は、綿布、綿製品、綿絲、石油、鐵道用車輛及同諸機械、各種機械、（電氣機械を含む）、棉花、砂糖、紙卷煙草、米、食料品、麥粉、紙、鐵道枕木、木材、銅等でありまして、右の內前年に比し綿絲布の輸入は一般に甚しく減少を見、特に日本品に於て著しく、英國品亦減少の傾向を辿れるのでありまして、右は主として支那品の增加に基因するものと申すべく、金屬品の輸入亦少しく減少せる傾向にありますが、之は下級品の價格著しく下落せる爲め支那商は契約品の引取をなさず、徒らに倉庫內に堆積せられつゝあつた等の事情に因るものと考へられます。一方各種工業の勃興に伴れ、諸機械及器具類の輸入額著しく增加致し、其額實に九百萬兩（前年に比し二百五十萬兩增加）に達し、染料も亦約十五割の激增を來し、獨逸は一躍して戰前の輸入額を獲得するに至りましたが、右は英國に於て獨逸染料の輸入を制限致した爲め、獨逸は窮餘全力を支那市場に集注するに至りたると、其價格亦往年の約五割に下落し、且つ長期掛賣を實行せる等に基因する儀と考へられます。

而して本邦よりの重要輸入品は綿布、綿製品、綿絲、枕木其他の鐵道材料、紙、砂糖、電氣材料及同附屬品、染料顏料及塗料、雜貨等でありまして、右の內鐵道材料は前年に比し著しく增加し、紙、砂糖等又相當市況を持續しつゝある以外、綿絲布、一般雜貨、硫化ブラック以外の染料等は孰れも減少し、就中燐寸、縫針等は著しく減少を來したのであります。

（ロ）、輸出重要品は棉花、羊毛、鷄卵、甘草、麥稈眞田、種物類、豆類、毛類、皮革類、石炭等でありまして、右の內前年に比し單り麥稈眞田に於て若干の減少を來したる外孰れも增加し、就中羊毛、棉花及鷄卵に於て激增致したのでありまして、右激增品三種中羊毛は主として米國へ（數

量、金額共約六倍に增加)、又鷄卵(數量、金額共約二倍に增加)及棉花(數量、金額共に約二倍に增加)は、共に日本への輸出を激增致したものであります。

(ロ) 而して右の內本邦への重要輸出品は棉花、鷄卵、羊毛、麥稈眞田、棉實、皮類、種物類等でありまして、重要品中の重要品たる棉花及鷄卵の本邦向輸出額を激增したことは前述の通りであります。

而して以上は大正十年の貿易狀況でありまして、客年の貿易額は未詳でありますが、彼の奉直戰爭及北京政界の不安定等の爲め商取引久しく澁滯せる上、京奉線、津浦線其他の鐵道貨車が、右戰爭の爲めに久しく不足を來したる結果として、折角の契約品も之が輸送に由なく、徒らに滯貨を生ずるのみなりし事情に徵し、同年の輸出入貿易額は共に惡影響を免れざりし儀と思考せらるゝのであります。

因に當地に於ける各國商社數を擧げますと、

(イ)、日本國	三六三	(ニ)、佛國	三四	(ト)、伊太利	一九
(ロ)、英國	九三	(ホ)、露國	三三	(チ)、白耳義	一二
(ハ)、米國	四一	(ヘ)、獨逸	三〇	(リ)、其他	八

合計六百三十三でありまして、內本邦商社三百六十三中其主要なるものを擧げますと、橫濱正金銀行支店、朝鮮銀行支店、日本郵船會社支店、大阪商船會社支店、大連汽船會社支店、三井物產會社支店、三菱商事會社支店、住友洋行支店、大倉商事會社支店、伊藤忠商事會社支店、怡豐洋行、江商株式會社支店、富士製紙會社支店、和歌山皮革會社支店、泰東洋行、乾卯商店、湯淺七左衛門商店出張所、日本棉花株式會社出張所、山玉號、三共洋行、松昌洋行、大文洋行等であります。

(丙)、工業 當地に於ける工場は、

種類	工場數	職工數	摘要
(イ)、紡績工場	六	二六、三五〇	裕元、華新、恒源、北洋、裕大及寶成にして何れも支那人の經營に屬す、
(ロ)、燐寸工場	五	三、〇〇〇	日本人經營のもの二、支那人經營のもの三。
(ハ)、製革工場	五	二五〇	日支合辦の裕津皮革公司の工場を最も大規模のものとなす。
(ニ)、植物油製造工場	五	二五〇	日本二、伊太利一、佛蘭西一、支那一、
(ホ)、製粉工場	三	二一〇	何れも支那人經營、
(ヘ)、硝子製造工場	三	三七〇	日本二、支那一、
(ト)、煙草製造工場	四	六〇〇	日本一、希臘三、
(チ)、骨粉工場	三	二二〇	何れも日人經營、
(リ)、冷藏工場	一		日本人經營、

種類	工場數	職工數	摘要
(ヌ)、清涼飲料水製造工場	六	三〇〇	
(ル)、石鹸製造工場	五	一五〇	

等の外、綿織物、毛織物、漂白、鐵工等小規模の工場は相當存するのであります。

因に邦人經營及日支合辦の主なる工場を擧げますと、

(イ)、中華燐寸會社（就業者八百人）。
(ロ)、裕津皮革公司（同百人）。
(ハ)、東亞燐寸會社（同四百五十人）。
(ニ)、武齋洋行骨粉工場（同百人）。
(ホ)、青島冷藏株式會社天津工場（一箇月の屠殺牛數約千頭）。
(ヘ)、東亞煙會社工場（就業者三百人）。
(ト)、清喜洋行肥料工場（同百人）。
(チ)、天津綿毛紡織會社（同二百人）。
(リ)、日華製油會社（同五十人）。
(ヌ)、天津製綿公司（同百二十人）。
(ル)、其他

であります、内裕津皮革のみは日支合辦、其他は孰れも日本人の經營であります。

要之、天津に於ける工業は、上海に比し著しく不振狀態にあることを認めらるゝのでありますが、之は天津在住の支那人に大資本家尠きこと、天津地方が物資に乏しきこと、上海人に比し工業を計畫する經驗並力量に乏しきこと等に因る儀と考へられ、尙ほ職工の勞銀の如きも、上海に比し約一割方安き代り能率に於て劣るとのことであります。

更に邦人にして今後同地に於て新に工業を經營せんとするに當り、最も障碍となる一事は、恐くは土地を得るに困難なることなるべしとのことであります。

(四)、濟南 (Chi-nan-fu)

(甲)、沿革、地勢、人口其他　濟南は古來屢改易に會ひたる上、最後に現在の歷城縣となつたのでありまして、山東省の省城たる上、津浦鐵道の主要驛（天津より二二〇哩、又浦口よりは四一一哩）にして且つ山東鐵道の極端驛（青島より二四六哩）なのであります。而して當地も鐵道開通以前は單に省城として有名なるに過ぎなかつたのでありますが、山東鐵道の開通に次で、津浦鐵道の全通を見、一は青島に、他は上海、天津等に連絡するに至り、一躍して地方貨物の集散地として著名とな

り、加之、一九〇五年（我明治三十八年）支那政府自ら此地を開放し、鐵道に接近せる一定の地域を限りて、外國人の借地、居住及貿易を許しました爲めに、同地域（商埠と稱せらる）の發展は實に急激なるものあり、今や殷盛なる一新市街を形成するに至つたのであります。

次に當地の人口は約三十九萬人（城内、城外及商埠共）と稱せられ、内本邦人二千二百六十二名、其他の外國人約三百名であります。

(乙)、對外貿易 前述の如く、當地は支那政府自ら開放した市場ではありますが、單に青島の附屬開市場たるに止まり、未だ獨立せる稅關の設けがない爲めに、其の輸出入は主として青島を始め天津、上海等よりせらるゝ儀であります、而して此等の輸出入額は、統計を缺くが爲めに詳かならざるも、大正十年中鐵道に依りて當地を發着せる貨物の數量は、

驛名	到着貨物	發送貨物
(イ)、山東線濟南驛	二〇七、二九九噸（外に家畜一七九頭）	一九二、六七〇噸（外に家畜三、六一六頭）
(ロ)、津浦線濟南驛	二三三、一八一噸（外に家畜九〇頭）	九七、九一二噸
(ハ)、合計	四四〇、四八〇噸（外に家畜二六九頭）	二九〇、五八二噸（外に家畜三、六一六頭）

であります、右の内主なる輸入品は綿布、綿絲、砂糖、石油、染料及塗料、硝子及同製品、燐寸及同材料、木材、昆布及其他の海産物等、又主なる輸出品は棉花、落花生、鷄卵、落花生油、麥程眞田、牛皮、獸骨、牛脂、藥品及藥材、桐及下駄材、麻、油粕、大豆等であります。

因に當地に於ける本邦商人の發展狀況を申上げますと、歐洲戰亂以前は、當地は全く獨逸の勢力範圍でありまして、邦商とては僅に賣藥、雜貨、文房具及玩具類の取扱産三四軒ありたると、外に神戸湯淺商店の出張所（落花生の買付）と三井の出張員一名ありたるに過ぎなかつたのであります。次で青島開戰と共に同地より百名斗り引上げ來り、更に青島陷落後同地に乘込む目的を以て天津其他より當地に集來せる者多數を加へ、翌大正四年四月には、邦人數約五百名に及んだのであります。さりながら、右は單に人數を增加したる斗りにて、別に之といふ事業に着手致した譯ではなかつたのでありますが、同年六七月より彼の釐錢の買付が始まりました爲めに遽に活氣を呈し、邦人居留者も亦千名を超過するに至り、加ふるに、從來主として獨逸商人に依りて取扱はれ居りたる電燈、電話其他の機械及材料を始めとし、化粧品、日用品等の一般雜貨類も亦、本邦より續々輸入せらるゝに至りたる一面、土地の産物を買付輸出する者も亦增加致したので、當地に於ける本邦人の勢力も從つて一大增進を來したのであります。然るに、休戰後前述釐錢の買付も止み、次で饑饉、不作、排日運動等の爲めに、當地に於ける邦人の商業も遽に不振狀態に陷つたのでありますが、客年秋頃よりは再び邦人の輸入取引を增進するに至り、此趨勢を以て進まむか、將來共相當取引を持續し得らるゝならんとのことであります。

而して現在當地に於ける主なる本邦商社は正金銀行、三井洋行、三菱洋行、鈴木商店、大倉洋行、清喜洋行、隆和洋行、安部幸洋行、日支商務公所等であります。

(丙)、工業　當地に於ける工業は、支那官營のものには工業試驗所、工藝傳習所、教養局及山東兵工廠又支那民營の主なるものには、

(イ)、興業繅絲廠（資本金五十萬元）。
(ロ)、華興造紙廠（資本金二十萬元）。
(ハ)、振業火柴有限公司（資本金四十萬元）。
(ニ)、濟南電燈公司（資本金百萬元）。
(ホ)、豐年麵粉公司（資本金四十萬元）。
(ヘ)、魯豐紗廠公司（資本金百萬元）。

等でありまして、右の外邦人經營のものには、

(イ)、青島燐寸株式會社濟南工場（支那祥陽火柴公司）。
(ロ)、滿洲製粉株式會社濟南工場。
(ハ)、中華蛋廠（目下休業中）。
(ニ)、出水骨粉會社濟南工場（目下休業中）。
(ホ)、太星公司濟南工場（目下休業中）。
(ヘ)、安泰工廠（骨粉製造）。

等を主なるものとし、尙ほ小規模のものには濟南罐詰製造所、橋本石鹼製造所及同製麵所があります。

而して以上邦人經營工場中、青島燐寸及滿洲製粉は、曾て當地に於ける猛烈なる排日運動の爲め、非常なる壓迫を蒙つたのでありますが、目下は安全に營業を持續しつゝあるのであります。

(五)、青　島 (Ching-tao)

(甲)、沿革、地勢、人口其他　青島なる名稱は、青島灣内の一小島の名に因めるものでありまして、元は眞の一漁村に過ぎなかつたのでありますが、支那戎克貿易が漸次發達するに伴ひ、清の乾隆帝の時始めて膠州稅關支局を設け、一八九一年（我明治二十四年）には更に鎭守府衙門を置き、砲臺及棧橋を築造し以て沿海防禦上の重鎭と爲したのであります。

然るに、夙に東洋方面に完全なる海軍根據地を獲得せんと焦慮しつゝあつた獨逸は、此地の自然的要害に着目し、一八六九年（我明治二年）より一八七〇年（我明治三年）に亘り、學者及武人を特派して、此地の軍事的並經濟的價値及港灣修築の可否等を調査せしめ、愈其有望なることを確む

るや、只管占領の機會を待ちゐたる際、偶ま一八九七年(我明治三十年)十一月中、山東省内に於て獨逸宣教師殺害事件勃發するや、好機逸すべからずとなし、直ちに支那政府に交渉を開始し、翌一九八八年(我明治三十一年)三月六日の獨支條約締結に依りて膠州灣一帶の租借權を獲得し、之を總稱して膠州と呼び、其市街區に冠するに青島の名を以てし、爾來拮据經營十有六年にして、元の一漁村は純然たる歐洲市街と化し、諸般の文明的施設を具備するに至つたのでありますが、去る大正三年の日獨戰役の結果、本邦の管理する所となり、以來八星霜各般の施設は倍整頓するに至つたのであります。然るに本邦に於ては、既に日獨戰爭當時よりの聲明に從ひ、客年十二月十日を以て當地をば支那に還附し終つたのであります。

次に當地は、山東鐵道に依りて支那内地各方面との交通ある外、海路の交通亦至便でありまして、我神戸、門司等の方面を始めとし、香港、上海、天津、芝罘、大連等より定期船の發著又は寄港船便がありますので、軍事上の點は別として、貿易港としても亦非常に重要なる地位を占めつゝあるのであります。

更に當地の人口は、總數九萬五千餘人中、邦人一萬八千餘人、歐米人約五百人でありましたが、還附後は人口上にも多少の異動を免れぬ儀と考へます。

(乙)、**對外貿易**　當港大正十年に於ける對外直接貿易額は、輸入額二千三百九十萬兩(海關兩、以下同じ)、輸出額一千九百四十萬兩(前年と略同額)、合計四千三百三十萬兩でありまして、右の外、輸入に於ては上海、大連等の支那諸港を經て輸入せられたる外國品の額一千〇三十六萬兩を加へ、海外及支那諸港へ再輸出せられたる額七十二萬兩を控除致しますと、結局外國品の總輸入額は三千三百五十四萬兩(前年に比し三割一分增加)となり、又輸出に於ては上海、天津、大連等の支那諸港へ輸出せられたる土貨の額一千四百七十七萬兩中、其等諸港を經て海外へ輸出せられたるものも相當存する譯であります。

次に當港大正十年に於ける對手國別(或は港別)割合を見ますと、日本内地三割、上海二割四分、香港六分、米國四分、大連三分五厘、其他三割二分五厘となつて居ります。

更に當港に於ける重要貿易品を擧げますと、

(イ)、輸入重要品　は綿絲、綿織物、石油、機械類、砂糖、卷煙草等でありまして、我日本内地よりは綿絲、機械類、綿織物、棉花、清酒、洋紙、日本紙等、又臺灣よりは砂糖其他輸入せられ。

(ロ)、輸出重要品　は落花生及落花生油、葉煙草、鷄卵、石炭、牛肉、桐材、牛皮、牛脂、麥稈眞田等でありまして、我日本内地へは鷄卵、石炭、牛肉、桐材、牛皮、牛脂、麥稈眞田、豆油糟、鐵鑛、葉煙草、鹽、生牛等を輸出せらるゝのであります。

因に當地に於ける主なる商社は正金銀行、朝鮮銀行、龍口銀行、三井洋行、三菱洋行、大倉商事、

日本郵船、大連汽船、伊藤忠商事、江商、隆和公司其他の各支店、出張所等、其數實に數十に達して居るのであります。

(丙)、工業 當地に於ける主なる工場を擧げますと。

(イ)、內外綿會社青島支店工場（運轉錘數二〇、八〇〇）。

(ロ)、華新紡織有限公司（運轉錘數三三、〇〇〇）。

(ハ)、大日本紡績株式會社工場（運轉錘數二〇、〇〇〇）。

備考、以上の外、目下計畫中のものには富士紡、鐘紡、日清紡及長崎紡あり、計畫全部完成の曉には、青島に於ける紡績錘數は約二十二萬餘錘に達すべし。

(ニ)、日華蠶絲株式會社青島絲廠（資本金二百五十萬圓）。

(ホ)、東和油房（資本金百萬圓）。

(ヘ)、東洋製油株式會社青島支店（資本金八十萬圓）。

(ト)、三井油房（資本金は必要に應じて本社より支出）。

(チ)、鈴木商店油房（同上）。

(リ)、吉澤油房（同上）。

(ヌ)、峰村製油工場（資本金五十萬圓）。

(ル)、日支鷄蛋公司（資本金五十萬圓、但し目下中止）。

(ヲ)、大星公司（鷄卵加工業にして資本金十六萬圓、但し目下中止）。

(ワ)、青島鹽業會社再製鹽工場（資本金百萬圓）。

(カ)、青島鑛泉會社湛山工場（資本金百五十萬圓、但し目下中止）。

(ヨ)、大連製氷會社青島支店（資本金五十萬圓）。

(タ)、大日本麥酒會社青島工場（資本金は必要に應じて本社より支出）。

(レ)、青島醬油株式會社（資本金五十萬圓）。

(ソ)、東魯燐寸株式會社（資本金百萬圓）。

(ツ)、青島燐寸會社燐寸製造工場（資本金三十萬圓）。

(ネ)、福隆燐寸株式會社（資本金五十萬圓）。

(ナ)、和田製材所（資本金二十五萬圓）。

(ラ)、青島製粉會社青島支店（資本金金五十萬圓）。

(ム)、青島冷藏株式會社。

(ウ)、青島玻璃製造會製造工場。

(ヱ)、山東興業株式會社（セメント製造業にして資本金百萬圓）。

等でありまして、其他小規模のものに至りては其數尠からぬのであります。而して以上に於て掲げましたものゝ内、華新紡績のみは支那人經營でありまして、其他は孰れも本邦人の經營に係るのであります。

(丁)、**青島商工業の將來**　私の青島に參りました時は、客年十二月上旬即ち同地の還附に差迫つた時でありました所から、土匪は既に青島附近に出沒して、一般支那居住民をして戰々兢々たらしめ、從つて支那の銀行商店等は何れも戸を堅く鎖し、避難者又踵を接するの狀態でありましたが、還附後同地に於ける治安の奈何、山東鐵道輸送能率の奈何等に因り、將來商工業上蒙る影響尠からぬ儀と考へらるゝのであります。

第五、結論

以上申述べました所を綜合致しますと、

(一)、支那に於ける工業の發達と、本邦商品の蒙る影響

支那に於ける工業の發達は、近來に至りて倍顯著なるものあり、就中紡績及織布に於て特に然るを認むるのでありまして、太番手の綿織絲及太絲を以て製織せらるゝ生地綿布即ちドリル或はシーチング等の如き下級品はどし〳〵外國品を驅逐致し居り、次に綿製品の如きもタオル、手巾、敷布、卓布手袋、靴下、莫大小肌衣、腿帶子等、又化粧品の如きも石鹼、香水、香油、鬢附、齒磨粉、白粉等、尙ほ其他の諸品に於ても燐寸、小麥粉、文房具、刷毛、齒刷毛、帽子、肩掛、鈕釦、鏡、革、革製鞄及錢囊、レース絲、洗面器、頭痛膏、紙卷煙草、玩具等の如きも亦支那に於て相當製造せらるゝに至り、就中燐寸、靴下、タオル、化粧品等の爲めに本邦品の壓迫を蒙りつゝあることは甚大なるものであります。尤も以上に擧げました諸品の中には、猶ほ粗製の域を脫せざるものも尠からぬのでありますが、其等と雖も年月を經るに隨つて順次發達致すのは明らかなことでありますから、決して樂觀を許さぬのであります。殊に支那製品の唯一の强味とも申すのは、生產費、運搬費等の關係上比較的廉價に販賣し得ることであり、然も此廉價と申すことは、多數支那人に依りて最も歡迎せらるゝ所でありますのと、近年頻りに提唱せられつゝある國產愛用といふ趣旨等も手傳ひまして、支那製品の需要は非常なる勢を以つて增進せられつゝあるのであります。

更に支那の工業に就て注意を要しますことは、例令は莫大小肌衣の如き、本邦より莫大小地を輸入して夫に加工し、又レース絲の如きも、本邦其他より原料絲を輸入し、夫に加工して以て製造致す等彼地に於ける低廉なる加工費を巧みに利用するに至つたことでありまして、此等の方法は支那に取りましては、頗る怜悧にして且つ有益なると共に、本邦品に取りましては、相當打擊たるを免れぬ儀で

あります。

而して以上は、主として支那に輸出せらるゝ本邦品の蒙る打撃に就てのみ申上げたのでありますが更に進んで考へますと、支那製品の價額が概して低廉なる關係上、單に支那に輸入せらるゝ外國品を驅逐するに止まらず、或種の物品例へば木炭、扇子、雨傘、疊表等の如きは進んで本邦へも盛んに輸出せらるゝに至り、尙ほ扇子、刺繍、象牙細工等の如き、從來主として本邦より歐米諸國へ供給せられつゝありましたものが、近年は支那よりもぽつ〳〵輸出せらるゝに至つたとのことでありますから將來支那に於ける工業の發達と、其價格の如何とに依りましては、或種の本邦品は、內地、支那及歐米諸國に於て、夫々支那品の壓迫を蒙るに至るなきやを保せぬのであります。

前述の如く、支那に於ける工業の發達に伴ひ、外國品の壓迫を蒙るは必然の勢でありまして、就中支那に於て最も需要の夥多なる、所謂低級品の供給を主としつゝある、我邦の蒙る打擊は特に甚大なるものが存するのであります。

(二)、日貨排斥と本邦品の蒙りたる影響

日貨排斥運動の一時旺盛でありましたことは、今猶ほ各地商店の受領書を始めとし、各種廣告等に「勿忘國恥」、「勿用日貨」、「振興實業、挽回利權」等の印刷せられつゝあるに徵するも、略想像に難からぬのでありまして、右運動の爲めに本邦品の蒙りたる打擊は無論甚太なるものがあつたのであります。而して其等の運動も目下幸に終熄の觀があるのでありますが、然し今は過去に屬する其等運動の爲めに、支那自身の製造工業の發達を促進致したことは實に甚大なるものがあるのでありまして、夫が爲めに現在並將來に於て本邦品の蒙る打擊の方が、日貨排斥に依りて直接蒙りたる打擊よりも寧ろ甚大なるべしと思考せらるゝのであります。

(三)、外國品と競爭狀態にある本邦品

次に本邦品にして外國品と競爭狀態にあるものを擧げますと。

(イ)、加工綿布及細物生地綿布　は主として英國品と。
(ロ)、砂糖　は主として香港糖と、但し香港糖は優勢。
(ハ)、洋紙　は歐米品と、但し本邦品は優勢。
(ニ)、銅製品　は英米品と。
(ホ)、染料　は歐米品と、但し本邦品の輸入は黑色硫化染料を主となす。
(ヘ)、麥酒　は獨逸品と、(支那品とも)但し本邦品は優勢。
(ト)、木材　は米國品と。

(チ)、窓硝子　は白耳義品と。
(リ)、紙卷煙草　は米國、英國、加奈陀及香港品と（支那品とも）。
(ヌ)、縫針　は獨逸品と、但し獨逸品稍優勢。
(ル)、製革　は香港品と（支那品とも）。
(ヲ)、絹織物　は佛國品と（支那品とも）。
(ワ)、セメント　は佛領印度品、香港品及其他と、但し本邦品は優勢。

(四)、外國品或は支那品との競爭多少存するも、本邦品特に優勢なる地位を占めつゝあるもの

を擧げますと、

(イ)、海產物　鱶鰭の如き本邦品以外南洋より輸入せらるゝものもないではありませぬが、海參、鰕、蛤、貝柱、昆布等は殆ど本邦品でありまして、奈何なる奥地に入りましても、支那料理の卓上常に此等の諸品を得ますことは、邦人に取りての一種の誇りであります。
(ロ)、加工綿布中　黑光付ジーンス、鼠色ジーンス、光付金巾、紅金巾、ネル類は既に英米品を驅逐し、又六ッ綾、綿代、五枚繻子類は本邦品の獨占に屬するのであります。
(ハ)、洋傘　は外國品の競爭とてはなく、支那品も亦下級品に屬しますので、本邦品は優勢の地位を占め居るのであります。
(ニ)、置、掛時計　は多少歐米品の競爭はありますが、本邦品は優勢。
(ホ)、琺瑯鐵器　歐米品の競爭は生じましたが、其輸入數量は未だ大したことはなく、支那製品も亦下級品に屬しますので、現在に於ては本邦品は猶ほ優勢を占めて居りますが、將來は容易に樂觀を許さぬことゝ考へられます。
(ヘ)、硝子製品　之亦歐米品との競爭生じましたが、其輸入數量は未だ多きに達せざる上、支那品も亦其數量並品質に於て缺くる所がありますので、本邦品は尙ほ優勢であります。
(ト)、燐寸材料　多少歐米品及支那品の競爭がありますが、本邦品は大部分を占めて居ります。
(チ)、洋燈口金、護謨靴、裝飾用又は頭髮用太絲　此等は殆ど本邦品の獨占狀態にあるのであります。

(五)、將來有望と認めらるゝ商品

を擧げますと。

(イ)、細番手綿織絲　將來支那に於ける織布工業の發達に伴れ、同品の需要を增進致すべく。
(ロ)、細物及加工綿布　此等の支那に於て製織せらるゝ迄には、相當年限を要するからであります。

(ハ)、工業用機械、器具及同部分品並附屬品　支那に於ける工業の發達に伴れ、此等の需要は倍增進致すからであります。

(ニ)、工業用原料及材料　是亦支那に於ける工業の發達に伴れ、必然其需要を增進致すからであります。

(ホ)、莫大小地、連製手巾、護謨紐、フエルト帽體、セルロイド板等　此等の半製品を輸入し、夫に簡單なる加工を施し、以て肌衣、手巾、靴下止或は洋袴吊、帽子、玩具其他を製造することは、支那に於ても十分爲し得るに至つたからであります。

(ヘ)、電燈、電話及水道用機械器具及同附屬品並材料　支那內地に於ける此等の設備は、猶ほ皆無若くは不十分なのでありますから、此等の供給は將來有望たるを失はぬのであります。

而して以上は單に主要なるものを擧げたるに過ぎぬのでありまして、右の外猶ほ尠からぬ儀と考へられます。

(六)、本邦商品販路の維持擴張上必要なる手段方法

之に就きましては、

(イ)、支那に供給する本邦品の向上を計ること　最近支那に於ける文化の發達に伴ひ、上流者間或は都會生活者間に漸次精巧品を需要するに至りたることは事實でありまして、其等に對しては精巧品の供給を要することは無論でありますと共に、支那人の大多數を占むる下流者或は地方住民の間には、尙ほ低級品の需要旺盛なることも亦否むべからざる事實でありまして、彼地に於ては都會と地方とを論ぜず、猶ほ穴明錢乃ち一文錢が盛んに流通せられつゝある一事に徵しましても、其生活程度が略想像せられ得るのであります。然し前にも申述べました通り、近年特に顯著となりました支那工業の發達に伴ひ、或種低級品は着々として自給自足の域に達しつゝあるのでありますから、將來は少くも支那製品に優越せる商品の供給に努むるの要あるべき儀と思考せらるゝのであります。

(ロ)、出來得る限り廉價品の供給に努むること　支那に於ける多數民衆の生活程度は、何と申しても猶ほ低級にあるのでありますから、其需要する物品も亦從つて廉價たるを要することは、殆ど言を俟たざる所でありまして、近年本邦品の支那製品の爲めに壓迫を蒙りつゝある所以も亦主として右の條件を具せざるが爲めに外ならぬのでありますから、生產費の低下、取引方法の改善等に依り、出來得る限り廉價品の供給に努むることは、最も必要の儀と考へられます。

(ハ)、濫造品の供給を中止すること　之は一般輸出貿易に就て不絕稱導せらるゝ所でありますが、他國に對しましてはいざ知らず、支那に對しては遺憾ながら斯る弊害猶ほ尠からぬことを認むるの

てあります。尤も右は對手が廉價品を需要する關係上自然斯る弊害をも醸成する儀と想像せらるゝのでありますが、歐洲戰亂も既に終熄し、目下外國品との競爭に加ふるに、支那品との競爭を惹起しつゝある場合、斯る弊害は是非共中止せなければならぬ儀と考へられます。

(ニ)、支那人の風俗習慣並其趣味嗜好等に關する研究を忽にせざること　例へば色彩、文字、繪圖等に致しても、支那人特有の好、不好あるは勿論、中には非常に嫌忌するものすら存するのでありますから、其等の研究は決して忽にすることが出來ぬのであります。從つて我內地向に製造せられたる物品を、以上の諸件に就て何等考慮することなく、漫然として支那に仕向くるが如きは、必然避くべき儀と考へられます。

(ホ)、商標に重きを置くこと　支那人の風習として商標に信を置くことは有名なものでありますから己が商標は飽迄も之を保持し、支那人間に出來得る限り馴知せしむるの要あるのでありまして、此呼吸を悟得したる歐米人は、最初は比較的廉價を以て賣始め、商標の周知せらるゝに伴れ、漸次其價格を釣上ぐる方法を採るに反し、本邦人は兎角賣焦りて漸次價格を釣下げ、或は次より次と新らしき商標の品を賣込む癖あることは、大に反省を要する儀と考へます。(尤も邦商中にも、排日當時と雖も斷乎として己が商標を變更せなかつた爲め、今は却つて信用を博しつゝある者もないてはありませぬが)。尙ほ一般商標に使用する文字、圖繪、色彩等に就ても、支那人に適用する樣特に注意を要することは、申す迄もないことであります。

(ヘ)、相當廣告を利用すること　街頭廣告たると、新聞廣告たるとを論せず、支那人對手に己が商品を廣告することは、或程度是非共必要な儀と考へます。尙ほ廣告文の如きも、英文や、漢文よりも、是非共時文(漢文は一般支那人には讀めませぬから)を用ふるの必要があるのであります。

(ト)、商品の統一を計ること　支那は大國丈ありまして、商品需要地の範圍も頗る廣汎に亘り、從つて相當大量取引が行はるゝのでありますから、商品の統一を計るといふことも亦必要の儀と考へられます。

(チ)、信用ある支那商店を選擇して代理店と爲すこと　之は萬一其選擇を誤らむか却つて害を爲す場合も無いとは限りませぬが、十分調査の上信用ある商店を選擇するに於ては、相當效果あるべきことを疑はぬのであります。

(リ)、實着なる對支貿易業者の奮起を希望すること　支那の都會たる上海、漢口、天津等に於ては、支那人對手に大取引を行ひつゝある本邦商店の數も尠からず認むるのでありますが、一旦內地に入りますと、我租界もあり、領事館等も存する地にして猶ほ、對支貿易に從來しつゝある邦人甚だ尠少なるの感あるを免れぬのでありまして、之には邦人奮鬪の餘地猶ほ十分存することゝ考へらるゝのであります。尙ほ茲には特に貿易といふ語を使用しましたが、支那人對手に小賣業を行

ふが如きも無論大に奬勵すべき儀と考へます。

(ヌ)、徒らに邦商間の競爭を避くること　支那に於て多數邦商の活動を希望することは前述の通りでありますが、さりとて、先人が苦心努力の結果漸くにして販路を擴張し得たる地盤に喰込み、賣崩し其他の方法を以て徒らに競爭を試むるが如きは、大に愼むべきことでありまして、其結果は共倒れの慘事を現出し外國商をして徒らに漁父の利を占めしむるに過ぎぬのであります。

(ル)、包裝の改善を必要とすること　本件に關しましては、一昨年上海に於て開催せられたる在支日本人商業會議所聯合會の決議に基き、當農商務省へも請願書を提出せられた程でありますから、大に改善を要する儀と考へられます。

(ヲ)、支那海關の通關手續を忽にせざること　支那海關に提出せらるゝ仕入書其他の樣式に通曉せざる結果、通關上非常なる不利益を蒙ることあるは未だしも、往々にして不正行爲と誤認せらる場合も尠からぬのでありますから、本件に就ても十分注意を要する儀と考へられます。

(ワ)、金融機關の不備を補ふこと　上海、漢口、天津、青島等の都會に於てはさうでもありませぬが鎭江、蕪湖、沙市、宜昌、重慶、張家口等の諸地に於ては、之が機關甚だ不備たるを免れず、殊に本邦郵便局の撤廢後は、一層其不便を感ぜらるゝ次第でありますから、本件に關しても何等か適當の方法を講ずるの要あるべき儀と考へらるゝのであります。

(カ)、必要に應じては支那に於ける企業をも必要とすること　之は起業の性質と種類とに依りましては十分考慮を要する問題ではありますが、支那品或は外國品との競爭上必要なる場合には、支那に於ける企業或は日支合辨事業を經營する等のことも亦必要なるべき儀と考へられます。

(ヨ)、支那產原料品或は食料品の利用をも考慮すること　得んと欲すれば先づ與へよの趣旨に基き、支那に於て本邦品の販路を擴張せんが爲めには、支那產原料品或は食料品の本邦に於ける利用に就ても、現在以上或程度迄考慮するの必要あるべき儀と考へられます。

(タ)、支那產品の對外輸出に就ても考慮すること　現在に於ても本邦大貿易商の在支支店中、桐油、雜穀、鑛物等の對外輸出に努力しつゝあるものの相當存するも、本件に就ては尙ほ發展の餘地尠からざるべく、就中支那の寶庫と稱せらるゝ四川省の物資中には、從來既に外國に向つて輸出せられつゝある豚毛、桐油、藥材、獸皮等以外にも、此種適合品豐富なるべき儀と思考せらるゝのであります。

(レ)、本邦當業者の支那視察團を奬勵すると共に支那の本邦視察團をも歡迎すること　百聞一見に如かずの喩の通り少くも支那に關係を有せらるゝ當業者諸氏は、自ら支那の現狀を視察せらるゝ要あるは勿論、支那の當業者をも歡迎して本邦の產業狀態を示すことも亦、對支貿易上稗益する所尠からぬ儀と考へます。

(ソ)、支那主要都市に本邦商品陳列館或はデパートメント、ストーアを開設すること　例へば上海、漢口、天津等の主要都市に斯る機關を設くることは、本邦品の紹介上利益尠からぬ儀と考へられます。

(ツ)、支那の本邦留學生を優遇すること　本邦の風俗、言語等に通ずる支那人士の一人にても多からむことは、對支貿易の發展上最も便宜なる儀と考へられます。例令ば本邦に於て工業教育を受けたる支那人にして、支那に於て工業に從事する場合、或は本邦に於て醫學を修得せる支那人士にして、支那に歸りて醫師を開業する場合、自然本邦製工業機械或は工業藥品、さては醫療器械或は醫藥品等を使用するに至るべき道理なるが故であります。

(七)、今後の對支貿易に就て

前にも申述べました通り、近年支那に於ける工業の發達顯著なるものある結果、同製品の爲めに本邦品の壓迫を蒙ること甚大なるものあり、加ふるに戰後歐米品の輸入增加に伴ひ、其輸入品との競爭亦漸次激烈ならんとしつゝあるのであります。就中戰時中輸入杜絶狀態にありました獨逸品及白耳義品が、戰後着々として其輸入を增進しつゝあることは、最も注意を要する儀でありまして、試みに右兩國よりの輸入狀況を見ますと、

獨逸品の輸入は大正八年に於て初めて三百六十八兩（海關兩、以下同じ）を計上し、次で大正九年には五百四十二萬兩に、更に大正十年には一千三百三十五萬兩（支那に於ける輸入總額の一分四厘）に增加致し、尙ほ大正十年に於ける主要輸入品（價額十萬兩を超過せる）及同輸入額は、

○大正十年に於ける獨逸よりの主要輸入品同輸入額（單位海關兩）

アニリン染料	三、三九〇、二七八
人造藍	一、八五七、二二四
各種機械及器具類	一、〇〇四、六一六
電氣材料及裝置品	六一八、七一五
紙	三八〇、三三七
針	二七一、五〇六
鐵釘（リベットを含む）	二六〇、一七四
藥材	二二〇、五〇五
手工器具	二〇三、三六三
鐵條	一八三、八〇二
懷中時計及其他の時計	一六〇、八八一

寫眞材料	一五四、五一八
電信電話材料	一四三、二九八
理化學器具及醫療器具	一二二、〇二一
鐵製コップル及短截線	一二一、四九九
鍍金鐵線	一一六、八〇三
鐵　板	一一〇、四〇八
化學生產品（燐寸材料及藥材を除く）	一〇二、二五〇

であります。

あるのであります。

次に白耳義品の輸入額も、大正八年には僅に二十三萬兩に過ぎざりしものが、大正九年には四百九十七萬兩に、更に大正十年には一千〇六十四萬兩（全輸入額の一分一厘）に增加し、而して大正十年に於ける白耳義よりの重要輸入品（輸入額十萬兩を超過せる）及同輸入額は、

人造藍	一、四〇九、七〇〇兩
鐵道材料	九二二、〇〇〇
窓硝子	八二五、〇五二
各色染料	七五〇、一二八
各種機械及器具	六二八、三一九
軌　條	五二二、四七三
條　鐵	四八六、七三八
鐵道客車及貨車	三四七、〇九六
鐵釘（リベットを含む）	三二八、七六二
硝子及同製品	三〇七、〇一二
電氣材料及裝置品	二六〇、二四七
鐵筒管	二三五、六七四
電信電話材料	二二五、四二九
アングル形及丁形鐵	一七一、九〇二
紙	一四六、五六六
兵器及軍需品	一四二、七三四
護謨製品	一三四、一五五
建築材料	一二九、八八五

でありまして、其他輸入額十萬兩に達せざるものゝ品種に至りては甚だ多數なのであります。

斯くの如く、獨逸品及白耳義品の輸入は仲々に看過すべからざるものあり、殊に獨逸品及獨逸商に至りては、戰前に於ける信用を有する上、同商人の慣用手段たる長期支拂をも敢て辭せざる態度を以て、只管販路の回復に努力しつゝあるのでありますから、本邦品中爲めに壓迫を蒙りつゝあるものも實に尠からぬのであります。

從つて至る所本邦對支貿易悲觀の嘆聲を耳にする狀態なのでありますが、然し目下は、我對支貿易上最も熟慮と努力とを要する時期でありまして、唯徒らに戰時好況時を顧みつゝ退嬰悲觀を事とするを許さぬのであります。故に今後は、對支貿易上改善すべき弊害は出來る限り之を改善し、又排除すべき障害は極力之を排除し、尙ほ必要なる施設は積極的に之を施す等、新規蒔直しの覺悟を以て、奮勵努力を要する儀と考へられます。幸に支那は一葦帶水の我隣邦たる上、同國に於ける文化の程度が、猶ほ我商品の需要に適合しつゝあることは、對支貿易上本邦の獨占しつゝある强味でありますから、今後努力の奈何に依りましては、對支貿易の促進も亦必ずしも不可能ならぬ儀と考へらるゝのであります。（完）

大正十二年六月一日印刷
大正十二年六月六日發行

農商務省商務局

印刷者　東京市京橋區高代町四番地　高島幸三郎

印刷所　東京市京橋區高代町四番地　高島印刷所
電話京橋一五四七番

578
59

終